別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基　本　計　画									
事　項		記　入　欄							備　考
計画の区分		研究科の設置							
フリガナ 設置者		コクリツダイガクホウジン　ヒロサキダイガク 国立大学法人弘前大学							
フリガナ 大学の名称		ヒロサキダイガクダイガクイン 弘前大学大学院（Graduate School of Hirosaki University）							
大学本部の位置		青森県弘前市大字文京町1番地							
大学の目的		弘前大学大学院は，学術の理論及び応用を教授研究し，その深奥をきわめ，又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い，文化の発展に寄与することを目的としている。							
新設学部等の目的		グローバル化と共生の時代において，人文科学と社会科学を俯瞰し，特定領域の専門知識・技能のみならず，専門外の学問理論・方法論を諸課題の解決のために領域横断的に活用することのできる幅広いパースペクティブを備えた，人文社会科学分野の高度専門職業人を養成することを目的とする。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
		年	人	年次 人	人		年　月 第　年次		
	人文社会科学研究科 [Graduate School of Humanities and Social Sciences]								
	人文社会科学専攻 [Division of Humanities and Social Sciences]	2	16	－	32	修士（人文社会科学） [Master of Humanities and Social Sciences]	令和2年4月 第1年次	青森県弘前市大字文京町1番地	
	計		16	－	32				
同一設置者内における変更状況（定員の移行，名称の変更等）		【学部】 教育学部学校教育教員養成課程　［定員減］(△10)（令和2年4月） 医学部心理支援科学科　（　10）（平成31年3月意見伺い） 【大学院】 地域共創科学研究科 地域リノベーション専攻（修士課程）　（　15）（平成31年3月意見伺い） 産業創成科学専攻（修士課程）　（　15）（平成31年3月意見伺い） 人文社会科学研究科 文化科学専攻（修士課程）　（△10）（令和2年4月学生募集停止） 応用社会科学専攻（修士課程）　（△ 6）（令和2年4月学生募集停止） 教育学研究科 学校教育専攻（修士課程）　（△16）（令和2年4月学生募集停止） 教職実践専攻（専門職学位課程）　（△16）（令和2年4月学生募集停止） 教職実践専攻（専門職学位課程）［定員増］（　18） （平成31年4月事前伺い） 農学生命科学研究科 農学生命科学専攻（修士課程）　［定員減］（△10）（令和2年4月）							

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
		講義	演習	実験・実習	計	
	人文社会科学研究科	62科目	79科目	0科目	141科目	30単位

教員組織の概

	学部等の名称	専任教員等 教授	准教授	講師	助教	計	助手	兼任教員等	
		人	人	人	人	人	人	人	
新設分	人文社会科学研究科								
	人文社会科学専攻（修士課程）	19 (19)	27 (26)	12 (12)	2 (0)	60 (57)	0 (0)	6 (9)	
	教育学研究科								平成31年4月事前伺い
	教職実践専攻（専門職学位課程）	19 (19)	13 (13)	9 (9)	1 (1)	42 (42)	0 (0)	46 (46)	
	地域共創科学研究科								平成31年3月意見伺い
	地域リノベーション専攻（修士課程）	15 (15)	9 (9)	3 (3)	0 (0)	27 (27)	0 (0)	1 (1)	
	産業創成科学専攻（修士課程）	13 (13)	13 (13)	1 (1)	6 (6)	34 (34)	0 (0)	6 (6)	
	計	66 (66)	62 (61)	25 (25)	9 (7)	163 (160)	0 (0)	― (―)	
既設分	医学研究科								
	医科学専攻（博士課程）	43 (43)	24 (24)	16 (16)	23 (23)	106 (106)	13 (13)	74 (74)	
	保健学研究科								
	保健学専攻（博士前期課程）	28 (28)	15 (15)	18 (18)	17 (17)	78 (78)	0 (0)	5 (5)	
	保健学専攻（博士後期課程）	28 (28)	14 (14)	7 (7)	0 (0)	49 (49)	0 (0)	0 (0)	
	理工学研究科								
	理工学専攻（博士前期課程）	38 (38)	40 (40)	3 (3)	18 (18)	99 (99)	0 (0)	16 (16)	
	機能創成科学専攻（博士後期課程）	19 (19)	16 (16)	0 (0)	0 (0)	35 (35)	0 (0)	2 (2)	
	安全システム工学専攻（博士後期課程）	24 (24)	20 (20)	0 (0)	4 (4)	48 (48)	0 (0)	0 (0)	
	農学生命科学研究科								
	農学生命科学専攻（修士課程）	25 (25)	29 (29)	0 (0)	9 (9)	63 (63)	0 (0)	31 (31)	
	地域社会研究科								
	地域社会専攻（後期3年博士課程）	15 (15)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	22 (24)	0 (0)	0 (0)	
	医学部附属病院	0 (0)	9 (9)	35 (35)	69 (69)	113 (113)	32 (32)	0 (0)	
	被ばく医療総合研究所	3 (3)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	
	地域戦略研究所	5 (5)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	12 (12)	0 (0)	0 (0)	
	生涯学習教育研究センター	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	
	保健管理センター	1 (1)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	
	国際連携本部	0 (0)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	4 (4)	
	教育推進機構	1 (1)	4 (4)	1 (1)	4 (4)	10 (10)	0 (0)	47 (47)	
	COI研究推進機構	1 (1)	0 (0)	2 (2)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	
	COC推進室	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	男女共同参画推進室	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	

要	計	231 (231)	188 (188)	84 (84)	150 (150)	653 (655)	45 (45)	— (—)	
	合　計	278 (278)	241 (240)	109 (109)	159 (157)	787 (784)	45 (45)	— (—)	

	職　種	専　任	兼　任	計	
教員以外の職員の概要	事務職員	人 307 (307)	人 295 (295)	人 602 (602)	
	技術職員	733 (733)	299 (299)	1032 (1032)	
	図書館専門職員	3 (3)	0 (0)	3 (3)	
	その他の職員	3 (4)	94 (94)	97 (98)	
	計	1,046 (1,046)	688 (688)	1,734 (1,734)	

	区　分	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
校地等	校舎敷地	76,254 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	76,254 ㎡	大学全体
	運動場用地	82,910 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	82,910 ㎡	
	小　計	159,164 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	159,164 ㎡	
	その他	169,525 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	169,525 ㎡	
	合　計	328,689 ㎡	0 ㎡	0 ㎡	328,689 ㎡	

	専　用	共　用	共用する他の学校等の専用	計	
校　舎	166,963 ㎡ (166,963 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	0 ㎡ (0 ㎡)	166,963 ㎡ (166,963 ㎡)	大学全体

	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
教室等	102室	111室	459室	12室 (補助職員0人)	7室 (補助職員0人)	

	新設学部等の名称	室　数	
専任教員研究室	人文社会科学研究科	57　室	

	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
図書・設備	—	821,909〔232,587〕 (821,909〔232,587〕)	24,806〔6,310〕 (24,806〔6,310〕)	7,047〔5,717〕 (7,047〔5,717〕)	2,213 (2,213)	6,242 (6,242)	10 (10)	大学全体
	計	821,909〔232,587〕 (821,909〔232,587〕)	24,806〔6,310〕 (24,806〔6,310〕)	7,047〔5,717〕 (7,047〔5,717〕)	2,213 (2,213)	6,242 (6,242)	10 (10)	

	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
図書館	7,680 ㎡	626 席	868,473 冊	

	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要		
体育館	文京町 3,394 ㎡	野球場（2面）	武道場（883㎡）	
		弓道場（140㎡）	テニスコート（8面）	
	本町 1,457 ㎡	プール（50m）	サッカー・ラグビー場（2面）	
		馬房（196㎡）	400mトラック	

		区　分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
経費の見積り及び維持方法	経費の見積り	教員１人当り研究費等		—	—	—	—	—	—	国費（運営費交付金）による
		共同研究費等		—	—	—	—	—	—	
		図書購入費	—	—	—	—	—	—	—	
		設備購入費	—	—	—	—	—	—	—	

の概要	学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次
		－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円	－ 千円
	学生納付金以外の維持方法の概要	―					

	大学の名称	弘前大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
		年	人	年次人	人		倍			
既設大学等	【大学院】									
	人文社会科学研究科								青森県弘前市大字文京町1番地	
	（修士課程）									
	文化科学専攻	2	10	－	20	修士（人文社会科学）	1.00	平成11年度		
	応用社会科学専攻	2	6	－	12	修士（人文社会科学）	1.33	平成11年度		
	教育学研究科								青森県弘前市大字文京町1番地	
	（修士課程）									
	学校教育専攻	2	16	－	32	修士（教育学）	1.09	平成6年度		
	教科教育専攻	2	－	－	－	修士（教育学）	－	平成6年度		平成29年度より学生募集停止
	養護教育専攻	2	－	－	－	修士（教育学）	－	平成14年度		平成29年度より学生募集停止
	（専門職学位課程）									
	教職実践専攻	2	16	－	32	教職修士（専門職）	0.99	平成29年度		
	医学研究科								青森県弘前市大字在府町5番地	
	（博士課程）									
	医科学専攻	4	60	－	240	博士（医学）	0.91	平成16年度		
	保健学研究科								青森県弘前市大字本町66番地1	
	（博士前期課程）									
	保健学専攻	2	30	－	60	修士（看護学又は保健学）	1.08	平成19年度		
	（博士後期課程）									
	保健学専攻	3	12	－	36	博士（保健学）	1.05	平成19年度		
	理工学研究科								青森県弘前市大字文京町3番地	
	（博士前期課程）									
	理工学専攻	2	120	－	240	修士（理工学）	0.85	平成22年度		
	（博士後期課程）									
	機能創成科学専攻	3	6	－	18	博士（理学又は工学）	0.44	平成16年度		
	安全ｼｽﾃﾑ工学専攻	3	6	－	18	博士（理学又は工学）	1.38	平成16年度		
	農学生命科学研究科								青森県弘前市大字文京町3番地	
	（修士課程）									
	農学生命科学専攻	2	60	－	120	修士（農学生命科学）	0.86	平成24年度		
	地域社会研究科								青森県弘前市大字文京町1番地	
	（後期3年博士課程）									
	地域社会専攻	3	6	－	18	博士（学術）	1.22	平成14年度		
	【学部】									
	人文社会科学部						1.03		青森県弘前市大字文京町1番地	
	文化創生課程	4	110	0	440	学士（人文社会科学）	1.02	平成28年度		
	社会経営課程	4	155	0	620	学士（人文社会科学）	1.04	平成28年度		
	人文学部								青森県弘前市大字文京町1番地	
	人間文化課程	4	－	－	－	学士（人文社会科学）	－	平成17年度		

	現代社会課程	4	—	—	—	学士(人文社会科学)	—	平成17年度		平成28年度より学生募集停止
	経済経営課程	4	—	—	—	学士(人文社会科学)	—	平成17年度		
	教育学部						1.03		青森県弘前市大字文京町1番地	
	学校教育教員養成課程	4	150	0	600	学士(教育学)	1.04	平成12年度		
	養護教諭養成課程	4	20	0	80	学士(教育学)	1.02	平成12年度		
の	生涯教育課程	4	—	—	—	学士(教育学)	—	平成12年度		平成28年度より学生募集停止
	医学部						1.00			
	医学科	6	112	2年次 20	772	学士(医学)	1.00	昭和24年度	青森県弘前市大字在府町5番地	
	保健学科	4	200	3年次 30	860	学士(看護学又は保健学)	1.01	平成12年度	青森県弘前市大字本町66番地1	
	理工学部						1.01		青森県弘前市大字文京町3番地	
	数物科学科	4	78	3年次 2	316	学士(理工学)	1.01	平成28年度		
状	物質創成化学科	4	52	3年次 1	210	学士(理工学)	1.00	平成18年度		
	地球環境防災学科	4	65	3年次 2	264	学士(理工学)	1.01	平成28年度		
	電子情報工学科	4	55	3年次 2	224	学士(理工学)	1.04	平成18年度		
	機械科学科	4	80	3年次 2	324	学士(理工学)	1.01	平成28年度		
	自然エネルギー学科	4	30	3年次 1	122	学士(理工学)	1.02	平成28年度		
	数理科学科	4	—	—	—	学士(理工学)	—	平成18年度		平成28年度より学生募集停止
	物理科学科	4	—	—	—	学士(理工学)	—	平成18年度		
	地球環境学科	4	—	—	—	学士(理工学)	—	平成18年度		
	知能機械工学科	4	—	—	—	学士(理工学)	—	平成18年度		
況	農学生命科学部						1.02		青森県弘前市大字文京町3番地	
	生物学科	4	40	0	160	学士(農学生命科学)	1.02	平成20年度		
	分子生命科学科	4	40	0	160	学士(農学生命科学)	1.01	平成20年度		
	食料資源学科	4	55	0	220	学士(農学生命科学)	1.00	平成28年度		
	国際園芸農学科	4	50	0	200	学士(農学生命科学)	1.03	平成28年度		
	地域環境工学科	4	30	0	120	学士(農学生命科学)	1.04	平成28年度		
	生物資源学科	4	—	—	—	学士(農学生命科学)		平成20年度		平成28年度より学生募集停止
	園芸農学科	4	—	—	—	学士(農学生命科学)		平成20年度		

(附置研究所)

名　　称：被ばく医療総合研究所

目　　的：本学における放射線被ばく医療に関する研究を推進し，各学部，各研究科等における教育の支援等を行うほか，緊急被ばく事故に対応できる専門的人材の養成を行うことを目的とする。

所 在 地：弘前市大字本町66番地1

設置年月：平成22年10月

規 模 等：保健学研究科内

名　　称：地域戦略研究所

目　　的：本学における新エネルギーの研究開発及び食料科学に関わる専門的かつ学際的な研究を推進し，本学の教育研究の進展と社会及び産業の発展に資することを目的とする。

所 在 地：（新エネルギー研究部門）青森市大字松原2丁目1番地3
（食料科学研究部門）青森市大字柳川2丁目1番地1

設置年月：平成30年4月

規 模 等：（新エネルギー研究部門）土地　1,604㎡，建物　2,454㎡
（食料科学研究部門）土地　516㎡，建物　316㎡

(附属図書館)

名　　称：附属図書館

目　　的：附属図書館は，教育，研究及び学習活動に資するため，図書，雑誌その他の資料を収集，管理し，本学の職員及び学生の利用に供するとともに，地域社会の図書館活動に協力し，学術情報の利用に寄与することを目的とする。

所 在 地：（本館）弘前市大字文京町1番地
（医学部分館）弘前市大字在府町5番地

設置年月：（本館）昭和24年5月
（分室）昭和27年3月

規 模 等：（本館）土地　135,267㎡，建物　6,111㎡
（医学部分館）　医学部内

（学部等の附属施設）

名　　称：教育学部附属幼稚園

目　　的：幼児に適切な環境を与えてその心身の調和的発達を助長するとともに，教育学部における幼児教育の実証的研究に協力すること，教育実習の場となり，学生の実習指導を行うこと，幼児教育の促進向上のために，積極的に地域の教育機関に協力，寄与することを達成することをもって目的とする。

所 在 地：弘前市大字学園町1番地1

設置年月：昭和26年4月

規 模 等：建物　1,065㎡

名　　称：教育学部附属小学校

目　　的：心身の発達に応じて初等普通教育を施し，併せて教育学部における小学校教育の実証的研究に協力し，又，学部の計画に従い，学生の教育実習の実施に当たるほか，小学校教育の振興，向上発展のために，積極的に地域の教育機関に協力，寄与することをもって目的とする。

所 在 地：弘前市大字学園町1番地1

設置年月：昭和40年4月

規 模 等：建物　8,288㎡

名　　称：教育学部附属中学校

目　　的：小学校における教育の基礎の上に，心身の発達に応じて，中等普通教育を施し，併せて教育学部における中学校教育の実証的研究に協力し，また，学部の計画に従い，学生の教育実習の実施に当たるほか，中学校教育の振興，向上発展のために，積極的に地域の教育機関に協力，寄与することをもって目的とする。

所 在 地：弘前市大字学園町1番地1

設置年月：昭和40年4月

規 模 等：建物　8,171㎡

名　　称：教育学部附属特別支援学校

目　　的：知的障害者に対して，小学校，中学校又は高等学校に準ずる教育を施し，障害による学習上又は生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けるとともに，教育学部における知的障害教育の実証的研究に協力すること，教育実習の場となり，学生の実習指導を行うこと，知的障害教育の発展のため，積極的に地域の教育機関に協力することを達成することを目的とする。

所 在 地：弘前市大字富野町1番地76

設置年月：平成19年4月

規 模 等：土地　10,617㎡，建物　3,874㎡

名　　称：教育学部附属教育実践総合センター

目　　的：附属学校園及び他の教育諸機関並びに地域社会と連携し，教育実践と学修支援に関する業務を担い，実践的指導力を持つ教員の養成に寄与するとともに，地域社会の教育活動を支援することを目的とする。

所 在 地：弘前市大字文京町1番地

設置年月：平成13年4月

規 模 等：建物　541㎡

名　　称：教育学部附属教員養成学研究開発センター

目　　的：教員養成学（教員養成の方法と効果に関する理論的実証的研究）を推進し，カリキュラム開発等に反映させることを通じて教員養成諸活動の不断の改善に寄与することを目的とする。

附属施設の概要	所 在 地： 弘前市大字文京町1番地 設置年月： 平成15年10月 規 模 等： 教育学部内 名　　称： 教育学部附属教員免許状更新講習支援室 目　　的： 更新講習に係る企画，立案，調整及び実施に関すること，講習内容及び実施方法の改善に関すること等の業務を行い，本学における更新講習の充実及び発展に寄与することを目的とする。 所 在 地： 弘前市大字文京町1番地 設置年月： 平成28年10月 規 模 等： 教育学部内 名　　称： 医学部附属病院 目　　的： 医学の教育及び研究の目的をもって，患者の診療を行うところとする。 所 在 地： 弘前市大字本町53番地 設置年月： 昭和24年5月 規 模 等： 土地　94,511㎡，建物　74,320㎡ 名　　称： 医学研究科附属脳神経血管病態研究施設 目　　的： 脳神経疾患の成因・病態の解明，診断法の確立，治療・社会復帰促進などに関する研究の推進を目指す。 所 在 地： 弘前市大字在府町5番地 設置年月： 平成11年4月 規 模 等： 医学研究科内 名　　称： 医学研究科附属高度先進医学研究センター 目　　的： プロジェクト型研究施設，共通機器施設としての機能を備え，疾病発生のメカニズムを分子レベルで解明し，実際の臨床の場に還元できるような研究を推進することを目的とする。 所 在 地： 弘前市大字在府町5番地 設置年月： 平成17年4月 規 模 等： 医学研究科内 名　　称： 医学研究科附属動物実験施設 目　　的： 実験動物の飼育管理の充実を図り，精度の高い動物実験による高度な研究・教育の推進を目指す。 所 在 地： 弘前市大字在府町5番地 設置年月： 昭和54年4月 規 模 等： 建物　4,894㎡ 名　　称： 医学研究科附属子どものこころの発達研究センター 目　　的： 様々な機関との連携を通し，子どものこころの問題に関する医療的支援や教育・研究活動を進め，東北地区の子どもに対する支援体制の整備や，研究拠点の創生を目的とする。 所 在 地： 弘前市大字在府町5番地 設置年月： 平成26年4月 規 模 等： 医学研究科内 名　　称： 理工学研究科附属地震火山観測所 目　　的： 地震観測及び火山観測並びに地震及び火山に関する研究を行い，併せて学生の地震学の実習を行うことを目的とする。 所 在 地： 弘前市大字文京町3番地 設置年月： 昭和56年4月 規 模 等： 建物　268㎡ 名　　称： 理工学研究科附属医用システム創造フロンティア 目　　的： 学内連携，地域連携による医用システムに関する研究，教育，社会貢献に関するCOC (Center Of Community：地域連携拠点)の機能を担い，研究分野では医学と理工学が協同し，地域企業との連携により新たな医用システム産業の創出を目的とする。 所 在 地： 弘前市大字文京町3番地	

設置年月： 平成26年4月
規 模 等： 理工学研究科内

名　　称： 農学生命科学部附属遺伝子実験施設
目　　的： 動植物微生物の遺伝子及びその機能に関わる基礎研究と動植物の品種改良など遺伝子工学に基づく応用研究を推進することを目的とする。
所 在 地： 弘前市大字文京町3番地
設置年月： 平成5年4月
規 模 等： 建物　1,527㎡

名　　称： 農学生命科学部附属生物共生教育研究センター
目　　的： フィールドサイエンス教育及び研究の拠点施設として，青森県の基幹産業である農業を教育・研究の両面から活性化し，地域の優れた人材，資源，技術，環境を地域から日本全国または世界へと発信することを目的とする。
所 在 地： （藤崎農場）南津軽郡藤崎町大字藤崎下袋7番地1
（金木農場）五所川原市大字金木町芦野84番地
（深浦実験所）西津軽郡深浦町大字吾妻沢173番地
設置年月： （藤崎農場）平成12年4月
（金木農場）平成12年4月
（深浦実験所）平成12年4月
規 模 等： （藤崎農場）土地　142,607㎡，建物　2,391㎡
（金木農場）土地　358,798㎡，建物　4,806㎡
（深浦実験所）土地　798㎡，建物　165㎡

名　　称： 農学生命科学部附属白神自然環境研究センター
目　　的： 本学の教育，研究，社会連携による地域貢献の推進を図ることを目的とする。
所 在 地： 中津軽郡西目屋村大字川原平大川添101番地1
設置年月： 平成22年10月
規 模 等： 土地　178,560㎡，建物　255㎡

（学内共同教育研究施設）
名　　称： 生涯学習教育研究センター
目　　的： 生涯学習に関する教育(医学及び保健に関することを含む。)及び研究を行い，本学の教育研究の進展と地域における生涯学習の振興に資することを目的とする。
所 在 地： 弘前市大字文京町3番地
設置年月： 平成8年5月
規 模 等： 弘前大学創立60周年記念会館コラボ弘大内

名　　称： 保健管理センター
目　　的： 本学学生等及び職員の保健管理に関する専門的業務の実施に当たることを目的とする。
所 在 地： 弘前市大字文京町1番地
設置年月： 昭和42年6月
規 模 等： 建物　477㎡

名　　称： アイソトープ総合実験室
目　　的： 放射性同位元素を使用する教育研究及び放射性同位元素の使用に関する安全管理を行うとともに，一般社会に対する放射線障害の防止に関する啓発を行うことを目的とする。
所 在 地： 弘前市大字在府町5番地
設置年月： 平成11年10月
規 模 等： 医学部内

名　　称： 出版会
目　　的： 学術関連図書及び教科書の刊行・頒布を主たる事業とし，本学の研究とその成果の発表を助成するとともに，我が国の学術・教育・文化の振興・発展に寄与することを目的とする。

	所 在 地： 弘前市大字文京町1番地 設置年月： 平成16年6月 規 模 等： 附属図書館（本館）内 名　　称： 資料館 目　　的： 本学における歴史的，博物的，学術的資料を展示，保存及び整理し，教育研究及び学習活動に資するとともに，地域社会の教育文化の発展に寄与することを目的とする。 所 在 地： 弘前市大字文京町1番地 設置年月： 平成24年10月 規 模 等： 附属図書館（本館）内	

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

人文社会科学研究科　人文社会科学専攻

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
専門能力科目		アカデミックライティング	1前後	2				○		8	13	8				オムニバス
		小計（1科目）	－	2	0	0		－		8	13	8	0	0	兼0	－
専門科目	文化芸術コース	博物館学	1前		2			○							兼1	
		先史考古学	1前		2		○				1					
		歴史考古学	1前		2		○			1						
		西洋考古学	1前		2		○			1						
		民俗学	1前		2			○		1						
		視覚文化学	1前		2		○				1					
		考古資料保存論	1前		2			○				1				
		民俗文化論Ａ	1前		2			○		1						
		音楽文化史	1前		2			○				1				
		日本古典文学Ａ	1前		2		○			1						※演習
		日本現代文学Ａ	1前		2		○					1				
		日本語学Ａ	1前		2		○								兼1	
		日本仏教文学論Ａ	1前		2		○			1						※演習
		日本近代文学論Ａ	1前		2			○				1				
		日本語学方法論	1前		2			○							兼1	
		日本語学資料論	1前		2			○							兼1	
		倫理学	1前		2		○				1					
		東アジア思想史	1前		2		○			1						
		中国古典学Ａ	1前		2		○			1						
		美術史	1前		2		○								兼1	
		現代音楽思想	1前		2		○			1						
		日本宗教文芸思想	1前		2		○				1					
		中国宗教思想	1前		2		○			1						
		文化財科学	1後		2		○					1				
		音楽学	1後		2			○				1				
		考古学資料調査	1後		2			○			1					
		文化財保護活用論	1後		2		○			1						
		古代地中海文化論	1後		2		○			1						
		民俗文化論Ｂ	1後		2			○		1						
		ルネサンス視覚文化論	1後		2			○			1					
		日本古典文学Ｂ	1後		2			○		1						※講義
		日本現代文学Ｂ	1後		2		○					1				
		日本語学Ｂ	1後		2		○								兼1	
		日本語史	1後		2		○								兼1	
		日本仏教文学論Ｂ	1後		2			○		1						※講義
		日本近代文学論Ｂ	1後		2			○				1				
		日本倫理思想史	1後		2		○				1					
		中国古典学Ｂ	1後		2		○			1						
		生命環境倫理思想	1後		2		○				1					
		東アジア思想文化論	1後		2			○		1						
		視覚芸術論	1後		2			○							兼1	
		地域アート・プロジェクト論	1後		2			○		1						
		小計（42科目）	－	0	84	0		－		7	4	3			兼4	－
	現代共生コース	一般言語学	1前		2		○			1						
		英語学	1前		2			○		1						
		英語構文学	1前		2		○					1				
		近代イギリス文学	1前		2			○			1					
		現代イギリス文学	1前		2			○				1				

	近代アメリカ文学	1前		2			○			1						
	外国語教育論	1前		2		○			1							
	言語文書処理	1前		2			○			1						
	アメリカ現代小説論	1前		2			○				1					
	西洋古典学	1前		2		○			1							
	中国史	1前		2		○			1							
	南アジア史	1前		2		○				1						※演習
	イスラーム史	1前		2			○				1					
	日本古代史	1前		2			○			1						
	グローバルヒストリー論	1前		2		○				1						
	近代日本政治思想史	1前		2		○					1					
	フランス地域論	1前		2			○			1						
	Intercultural Studies	1前		2			○			1						
	国際関係論	1前		2			○			1						
	ラテンアメリカ・カリブ地域論	1前		2			○			1						
	共生社会論	1前		2		○				1						
	中国社会論	1前		2			○		1							
	多言語教育論	1前		2			○			1						
	アメリカ社会論	1前		2			○			1						
	憲法	1前		2			○				1					
	民法	1前		2			○			1						
	刑法	1前		2			○		1							
	商法	1前		2			○			1						
	労働法	1前		2			○				1					
	比較政治制度論	1前		2			○				1					
	地方自治論	1前		2			○			1						
	言語規格論	1後		2		○				1						
	現代アメリカ文学	1後		2			○				1					
	言語類型論	1後		2		○			1							
	言語構造論	1後		2			○		1							
	言語統語論	1後		2		○					1					
	イギリス近代小説論	1後		2			○			1						
	イギリス現代小説論	1後		2			○				1					
	近代アメリカ文化論	1後		2			○			1						
	第二言語習得論	1後		2		○			1							
	西洋史	1後		2		○				1						
	日本近現代史	1後		2		○					1					
	ヨーロッパ古典文化史	1後		2		○			1							
	中国近世史	1後		2		○			1							
	南アジア近現代史	1後		2			○			1						※講義
	西アジア地域史	1後		2		○					1					
	日本古代地域史	1後		2			○			1						
	現代ヨーロッパ論	1後		2			○			1						
	現代アメリカ論	1後		2			○			1						
	フランス文化論	1後		2			○			1						
	Quantitative Analysis of Culture	1後		2		○				1						
	平和学	1後		2			○			1						
	民族芸術論	1後		2			○			1						
	現代オセアニア論	1後		2		○				1						
	現代中国論	1後		2			○		1							
	政治学	1後		2			○				1					
	行政学	1後		2			○			1						
	人権論	1後		2			○				1					
	民事法制論	1後		2			○			1						
	刑事司法論	1後		2			○		1							
	経済法制論	1後		2			○			1						
	社会保障法	1後		2			○				1					
	小計（62科目）	－	0	124	0	－			7	16	8	0	0	兼0	－	

政策科学コース	ミクロ経済学	1前		2		○				1					
	マクロ経済学	1前		2			○			1					
	経済政策	1前		2		○			1						
	経済理論史	1前		2			○		1						
	財政学	1前		2			○			1					※講義
	労働経済学	1前		2		○			1						
	国際経済学	1前		2		○					1				
	企業統治論	1前		2			○		1						
	経営組織論	1前		2		○								兼1	
	会計情報	1前		2		○			1						
	財務会計	1前		2		○				1					
	原価計算	1前		2			○			1					
	産業創出論	1前		2			○			1					
	サービスマーケティング論	1前		2		○								兼1	
	グローバル経営論	1前		2			○							兼1	
	経済学史	1後		2			○		1						
	産業組織論	1後		2		○				1					
	マクロ金融分析	1後		2			○			1					
	産業発展論	1後		2			○		1						
	現代企業論	1後		2		○								兼1	
	金融論	1後		2		○			1						
	地方財政論	1後		2			○			1					※講義
	雇用政策論	1後		2		○			1						
	貿易政策論	1後		2		○					1				
	イノベーション論	1後		2			○			1					
	実証会計	1後		2		○			1						
	国際財務報告	1後		2		○				1					
	管理会計	1後		2			○			1					
	ベンチャー企業論	1後		2			○							兼1	
	小計（29科目）	－	0	58	0	－			5	6	1	0	0	兼5	－
多領域横断型科目	グローバル化と共生社会	1前		2		○			6	15	4				オムニバス
	文化芸術社会の展望	1後		2		○			12	12	7				オムニバス
	共生の時代の経済・産業政策	1後		2		○			6	9	5				オムニバス
	小計（3科目）	－	0	6	0	－			17	23	11	0	0	兼0	－
特別研究／プロジェクト研究	特別研究Ⅰ	1通		4			○		19	26	12				
	プロジェクト研究Ⅰ	1通		2			○		19	26	12				
	特別研究Ⅱ	2通		4			○		19	26	12				
	プロジェクト研究Ⅱ	2通		4			○		19	26	12				
	小計（4科目）	－	0	14	0	－			19	26	12	0	0	兼0	－
合計（141科目）		－	2	286	0	－			19	26	12	0	0	兼9	－

学位又は称号	修士（人文社会科学）	学位又は学科の分野	文学関係，経済学関係，法学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
【修士論文選択者】 必修科目２単位，選択科目２６単位（所属コースの専門科目から１０単位，所属コース以外の専門科目から４単位，多領域横断型科目から４単位，特別研究８単位）以上を修得し，３０単位以上修得すること。 【個別課題報告書選択者】 必修科目２単位，選択科目２４単位（所属コースの専門科目から１０単位，所属コース以外の専門科目から４単位，多領域横断型科目から４単位，プロジェクト研究６単位）以上を修得し，３０単位以上修得すること。	１学年の学期区分	２学期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

（既設）人文社会科学研究科　文化科学専攻　総合文化社会研究コース

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
共通科目		北東北研究	1・2前	2			○			3	1				兼2	オムニバス
		小計（1科目）	－	2	0	0	－			3	1	0	0	0	兼2	－
特別研究		特別研究Ⅰ	1通	4				○		18	21	5				
		特別研究Ⅱ	2通	4				○		18	21	5				
		小計（2科目）	－	8	0	0	－			18	21	5	0	0	兼0	－
導入科目	文化財モジュール	美術史	1・2前後		2			○		2						オムニバス
		考古学	1・2前後		2			○				1				
		宗教学・民俗学	1・2前後		2		○			1						
	思想文芸モジュール	哲学	1・2前後		2		○			1						
		倫理学	1・2前後		2		○				1					
		文芸基礎論	1・2前後		2		○				1					
	アジア地域モジュール	日本語学	1・2前後		2		○					1				
		アジア文芸学	1・2前後		2		○			1		1				オムニバス
		アジア地域学	1・2前後		2		○			1						
	欧米地域モジュール	言語基礎論	1・2前後		2		○			1						
		欧米地域学	1・2前後		2		○				1					
		欧米文化論	1・2前後		2		○				2					オムニバス
	現代社会モジュール	経済学	1・2前後		2		○								兼6	オムニバス
		経営学	1・2前後		2		○								兼1	
		法学	1・2前後		2		○								兼5	オムニバス
	地域研究モジュール	地域雇用	1・2前後		2		○								兼1	
		地域経済	1・2前後		2		○								兼1	
		地域企業	1・2前後		2		○								兼4	オムニバス
	社会調査モジュール	社会調査設計	1・2前後		2		○								兼1	
		量的調査分析	1・2前後		2		○					1				
		質的調査分析	1・2前後		2		○			1	1				兼1	オムニバス
		小計（21科目）	－	0	42	0	－			8	6	4	0	0	兼20	－
専門科目		日本歴史論	1・2前後		2			○			1					
		中国歴史論	1・2前後		2		○			1						
		中国思想文化論	1・2前後		2			○		1						
		南アジア史論	1・2前後		2		○				1					
		西アジア史論	1・2前後		2			○				1				
		西洋歴史論	1・2前後		2		○				1					
		民俗学	1・2前後		2			○		1						
		西洋考古学	1・2前後		2		○			1						
		日本考古学	1・2前後		2			○			1					
		文化財調査・研究論	1・2前後		2		○			1						
		文化財科学	1・2前後		2		○					1				
		文化資源論	1・2前後		2		○				1					
		日本東洋美術史論	1・2前後		2		○			1						
		芸術史論	1・2前後		2			○		1						
		西洋古典学	1・2前後		2			○		1						
		日本倫理思想史論	1・2前後		2		○				1					
		西洋倫理思想史論	1・2前後		2			○			1					
		日本近代文学	1・2前後		2			○				1				
		日本古典文学	1・2前後		2			○		1						
		中国言語文化論	1・2前後		2			○							兼1	
		中国社会論	1・2前後		2			○		1						
		英文学Ｂ	1・2前後		2			○			1					
		英文学Ｃ	1・2前後		2		○				1					
		米文学	1・2前後		2			○			1					

	現代アメリカ論	1・2前後		2		○				1					
	フランス語言語・文化論	1・2前後		2			○			1					
	フランス文学	1・2前後		2			○			1					
	一般言語学	1・2前後		2		○			1						
	言語文書処理論	1・2前後		2		○				1					
	統語論	1・2前後		2			○		1						
	意味論	1・2前後		2			○		1						
	日本語史方法論	1・2前後		2		○					1				
	社会言語学	1・2前後		2		○			1						
	日本語教育論Ａ	1・2前後		2		○				1					
	日本語教育論Ｂ	1・2前後		2		○				1					
	情緒社会学	1・2前後		2			○		1						
	生態人類学	1・2前後		2			○		1						
	社会心理学Ａ	1・2前後		2		○				1					
	社会心理学Ｂ	1・2前後		2			○				1				
	応用言語学	1・2前後		2			○			1					
	現代ヨーロッパ研究	1・2前後		2		○				1					
	ドイツ論	1・2前後		2			○		1						
	文化人類学Ａ	1・2前後		2		○			1						
	文化人類学Ｂ	1・2前後		2			○			1					
	平和学	1・2前後		2			○			1					
	総合文化社会研究コース特設講義	1・2前後		2		○			18	21	5				
	小計（46科目）	－	0	92	0	－			18	21	5	0	0	兼1	－
総合科目	情報処理	1・2前後		1			○			1				兼1	オムニバス
	日本語・日本語論文作成技法	1・2前後		1			○			1					
	英語論文作成技法	1・2前後		1			○		1						
	小計（3科目）	－	0	3	0	－			1	2	0	0	0	兼1	
大学院共通科目	エネルギーと環境	1・2前後			2	○								兼11	オムニバス
	小計（1科目）	－	0	0	2	－			0	0	0	0	0	兼11	－
合計（74科目）		－	10	137	2	－			18	21	5	0	0	兼33	－

学位又は称号	修士（人文社会科学）	学位又は学科の分野	文学関係

別記様式第２号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　課　程　等　の　概　要

教養教育科目（人文社会科学部　文化創生課程）

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
教養教育科目	スタディスキル導入科目	基礎ゼミナール	1前	2				○		1	6					
		地域学ゼミナール	1後	2				○		2	2				兼 50	
		小計(2科目)	－	4	0	0		－		3	8	0	0	0	兼 50	
	ローカル科目	青森の行政	1前		2		○								兼 5	オムニバス
		青森の経済・産業	1前		2		○								兼 9	オムニバス
		青森の文化	1前		2		○			2	1	1			兼 8	オムニバス
		青森の歴史	1前		2		○								兼 3	オムニバス
		青森の芸術	1前		2		○					1			兼 2	オムニバス
		青森の民俗・芸能	1前		2		○								兼 2	オムニバス
		青森の自然	1前		2		○				1				兼 36	オムニバス
		小計(7科目)	－	0	14	0		－		2	1	2	0	0	兼 65	
	グローバル科目	グローバル社会・経済	1後		2		○								兼 8	オムニバス
		国際地域	1後		2		○			1		1			兼 3	オムニバス
		比較文化	1後		2		○								兼 2	オムニバス
		世界の芸術・芸能	1後		2		○			2					兼 4	オムニバス
		地球環境	1後		2		○								兼 11	オムニバス
		グローバルヘルス	1後		2		○								兼 5	オムニバス
		日本	1後		2		○			2					兼 6	オムニバス
		小計(7科目)	－	0	14	0		－		5	0	1	0	0	兼 37	
	学部越境型地域志向科目	青森の多様性と活性化	2前～4後		2		○			1		1			兼 34	オムニバス
		青森の食と産業化	2前～4後		2		○								兼 7	オムニバス
		市民参加と地域づくり	2前～4後		2		○								兼 6	オムニバス
		青森エクスカーション	2前～4後		2			○				1			兼 16	オムニバス
		地域プロジェクト演習	2前～4後		2			○							兼 24	オムニバス
		小計(5科目)	－	0	10	0		－		1	0	2	0	0	兼 76	
	社会・文化	くらし・文化	1前・後		2		○								兼 2	オムニバス
		歴史・地理	1前・後		2		○			2	2				兼 1	オムニバス
		思想	1前・後		2		○				1				兼 1	オムニバス
		言語学の世界	1前・後		2		○								兼 3	オムニバス
		文学	1前・後		2		○								兼 4	オムニバス
		芸術	1前・後		2		○								兼 12	オムニバス
		政治経済・社会	1前・後		2		○								兼 13	オムニバス
		法と社会Ａ	1前・後		2		○								兼 2	オムニバス
		法と社会Ｂ	1前・後		2		○								兼 4	オムニバス
		小計(9科目)	－	0	18	0		－		2	3	0	0	0	兼 39	
	自然・科学	環境と生活	1前・後		2		○								兼 27	オムニバス
		工学の世界	1前・後		2		○								兼 4	オムニバス
		農学の世界	1前・後		2		○								兼 7	オムニバス
		数学の世界	1前・後		2		○								兼 3	オムニバス
		物理学の世界	1前・後		2		○								兼 9	オムニバス
		化学の世界	1前・後		2		○								兼 10	オムニバス
		生物学の世界	1前・後		2		○								兼 20	オムニバス
		情報処理入門Ａ	1前・後		2		○								兼 4	オムニバス
		情報処理入門Ｂ	1前・後		2		○				1				兼 12	オムニバス
		小計(9科目)	－	0	18	0		－		0	1	0	0	0	兼 89	
	人間・生命	人間の尊厳	1前・後		2		○								兼 5	オムニバス
		人を育む営み	1前・後		2		○								兼 20	オムニバス
		心理学の世界	1前・後		2		○								兼 8	オムニバス
		メンタルヘルス	1前・後		2		○								兼 8	オムニバス
		生活と健康	1前・後		2		○								兼 10	オムニバス
		運動と健康Ａ	1前・後		2		○								兼 15	オムニバス
		運動と健康Ｂ	1前・後		2		○								兼 5	オムニバス
		医学・医療の世界	1前・後		2		○								兼 50	オムニバス
		情報と健康・医学	1前・後		2		○								兼 2	オムニバス
		小計(9科目)	－	0	18	0		－		0	0	0	0	0	兼 111	

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
	キャリア教育	キャリア形成の基礎	1後	1			○								兼 8	オムニバス
		キャリア形成の発展	2前		3		○								兼 9	オムニバス
		キャリアデザイン	2前～4後		2		○								兼 8	オムニバス
		小計(3科目)	－	1	5	0	－			0	0	0	0	0	兼 20	
	英語	Listening(初級)	1前		2		○			1	4	1			兼 5	
		Listening(中級)	1前		2		○				1				兼 14	
		Listening(上級)	1前		2		○				1				兼 3	
		Reading(初級)	1前		2		○				1	1			兼 5	
		Reading(中級)	1前		2		○								兼 14	
		Reading(上級)	1前		2		○				1				兼 3	
		Speaking(初級)	1後		2		○			2	3	1			兼 4	
		Speaking(中級)	1後		2		○				1				兼 15	
		Speaking(上級)	1後		2		○				1				兼 4	
		Writing(初級)	1後		2		○			2	2				兼 6	
		Writing(中級)	1後		2		○				1				兼 15	
		Writing(上級)	1後		2		○								兼 4	
		Integrated A(国際共通語としての英語)	2前		2		○								兼 3	
		Integrated B (一般学術目的の英語)Level 1	2後		2		○								兼 4	
		Integrated B (一般学術目的の英語)Level 2	3前		2		○								兼 1	
		Integrated C(キャリア英語)	3前		2		○								兼 3	
		小計(16科目)	－	0	32	0	－			2	6	1	0	0	兼 31	
	多言語	ドイツ語Ⅰ	1前		4		○								兼 5	
		フランス語Ⅰ	1前		4		○					1			兼 3	
		ロシア語Ⅰ	1前		4		○								兼 1	
		中国語Ⅰ	1前		4		○					1			兼 3	
		朝鮮語Ⅰ	1前		4		○								兼 1	
		日本語A	1前		2		○								兼 4	
		日本語B	1前		2		○								兼 2	
		ドイツ語Ⅱ	1後		4		○			1	1				兼 2	
		フランス語Ⅱ	1後		4		○				2	1			兼 0	
		ロシア語Ⅱ	1後		4		○								兼 1	
		中国語Ⅱ	1後		4		○			2		1			兼 0	
		朝鮮語Ⅱ	1後		4		○								兼 1	
		フランス語Ⅲ	2前		2		○				1				兼 0	
		ドイツ語Ⅲ	2後		2		○			1					兼 0	
		小計(14科目)	－	0	48	0	－			3	4	2	0	0	兼 17	
合計(81科目)			－	5	177	0	－			14	16	8	0	0	兼 423	

別記様式第２号（その３の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

授　業　科　目　の　概　要

（人文社会科学研究科　人文社会科学専攻）

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門技能系科目	アカデミックライティング	人文社会科学分野の大学院修士課程における共通かつ必須の学術的技能の習得・向上を図る。第一に，各々の専門分野で求められる研究構想力や文章の執筆及び構成力の訓練に力点をおく。この中には学術的成果の発信に必要となる，英語による論文・エッセイ等の作成技法も含まれる。第二に，学術論文作成に不可欠な各種資料の収集方法やそれらの取り扱い〔電子化されたものも含む〕を実践的に学び，専門家としてのリサーチスキルの向上を図る。講義全体を通して，高度で専門的な知見を学術的に表現する能力を，体系的に習得・向上させることが目的である。 （オムニバス方式／全15回） （前期1コマ・後期1コマ開講） （4 渡辺　麻里子，13 城本　るみ，16 福田　進治， 22 横地　徳廣，23 原　克昭，26 堀　智弘， 31 泉谷　安規，39 児山　正史，40 小谷田　文彦， 47 朝山　奈津子，50 土屋　陽子,57 桑波田　浩之/6回） （上記の教員グループより，各学期3名の担当教員を選定し，当該教員が2回ずつ担当する。） 人文学・社会科学のいずれの分野にも必要となる研究課題をいかに設定し，それに基づいた研究計画を立てていくかという研究に対する構想力と計画性を身につける。2年間の修士課程に見合った適切な課題の選択と実現可能な研究計画とその実践を構想できることに焦点をおく。 （12 荷見　守義，21 出　佳奈子，27 中村　武司， 44 小杉　雅俊，48 尾崎　名津子，51 亀谷　学， 53 河合　正雄，54 成田　史子／4回） （上記の教員グループより，各学期2名の担当教員を選定し，当該教員が2回ずつ担当する。） 研究計画の立案では先行研究の渉猟が不可欠なことから，研究活動に必須であるリサーチスキルの獲得に主眼を置く。文献資料の他に視覚資料やウェブサイトを利用した各種資料の扱い・入手方法を実践的に学び，研究課題に応じた参考文献リストを作成し，それらの論文での扱いに関する作法も学ぶ。 （6 山田　史生，7 今田　匡彦，8 山本　秀樹， 11 今井　正浩，24 内海　淳，25 小野寺　進， 49 近藤　亮一／4回） （上記の教員グループより，各学期2名の担当教員を選定し，当該教員が2回ずつ担当する。） 論文の全体像を提示する序論やその主たる論点を適度な量と表現でまとめる結論部の役割を学びながら，研究課題に応じてそれらを実際に執筆し，そのスキルを身につけていく。また，論文の内容を国内外に広く発信するために必要な英語による要旨の執筆も行う。 (32 BUTLER ALASTAIR JAMES／上記4回分取りまとめ) 提出された英語論文要旨等を批評・添削し，必要な指導を行う。 （34 南　修平／1回） 初回講義において本講義全体の目的及び進め方を周知するとともに，講義を通じて取り組んだ各人の成果を共有することで，今後の研究，とりわけ修士論文の取り組みにおいてどのようなスキルを身につけ，強化していく必要があるかを具体化する。	オムニバス方式

専門科目	文化芸術コース	博物館学	博物館は有形・無形，あるいは生物資源など人類が様々な形で残してきた文化資源の調査研究，保存，活用を担う。本講義では博物館活動における文化資源の発見，展示による活用，次世代への継承のための保存の各過程について実例をもとに解説する。また，実際の博物館の現場に出かけて現状を知ることで，社会との関わりにおいて博物館が置かれている立場と目指すべき姿について考察を深めることを目的とする。	
		先史考古学	北日本はその地理的特徴から中央の歴史とは異なる歴史を歩んできた。それは，先史時代から現れており，北日本独自の文化圏を築いてきた。本講義では青森県を含む北日本地域の旧石器時代から弥生時代までを中心に，まず考古学的理論について学ぶ。特に考古分析に必要な型式学的手法と，事実と解釈を結びつける中範囲理論およびプロセス考古学的視点に基づく資料の解釈過程について論じる。続いて，衣食住の文化，および交易・流通といった部分を中心に北日本における以上の実践例を通じて，どのように生業や社会の復元を行っていくかといった方法論を学習する。	
		歴史考古学	考古学は人類誕生から今日まで，生活痕跡から人間の営みを復元する学問であり，国内外の歴史や文化を理解することを目的として，文化資源を専門的に取り扱う重要な学問分野の一つである。大学院修了後に考古学の専門職として埋蔵文化財の発掘調査現場に従事するには，旧石器時代から近現代まであらゆる時代の遺跡・遺構・遺物に対応することが求められる。しかし同じ考古学でも無文字社会を対象とする先史考古学と異なり，歴史考古学は文献史学との共同作業が欠かせない。また，時代が新しくなればなるほど，民具や絵画・古地図・古写真などの画像資料，聞き取りなど，考古資料以外の多様な資史料との照合・突合せが必要である。授業では，中世～近現代を対象に，具体的な研究事例を紹介しながら，歴史考古学の理論と方法を学ぶ。	
		西洋考古学	西洋考古学の各トピック（気候，人口，都市計画，建築，地中海交易，農業，エネルギー，産業，技術，墓制，宗教，戦争，美術，再利用など，）について取り上げた包括的な欧文の研究書を選択して講読し，高度で専門的な知識を習得し，専門の研究方法や研究史を身に着けることに努める。同時におもにローマを中心とした古代地中海世界の各地域の繁栄と衰退の契機についての分析を行い，知識を得るとともに，現代における持続可能社会を実現するための資料とする。	
		民俗学	民俗学の研究のうち，今年度は「ふるさと資源化」について学ぶ。岩本通弥『ふるさと資源化と民俗学』を輪読し，民俗学における文化資源論を批判的に検討する。 授業の最初に講義形式で，研究の基礎となる日本の文化政策の概略とその変化を示す。その後，担当者を決め，文献を講読し，理解を深める。輪読担当者のすべての発表が終了した後に，今日の地方における文化の現状と文化政策の影響や今後の課題について議論を行う。	
		視覚文化学	人間が築きあげてきた視覚文化とは，いったい，社会においてどのように位置づけられ，認識されてきたのか。本講義の目的は，絵画・彫刻・映像などの視覚的媒体が人間社会において果たしてきた様々な役割を理解し，その社会的影響の有り様を考察することにある。ここでは，諸宗教における視覚媒体の位置づけと役割，政治的プロパガンダと表象の関係，マスメディアにおけるジェンダー表象の構造等の問題を例にあげ，視覚的媒体を学問的に研究する方法を学んでいく。授業は主として講義形式をとり，研究方法を身につけるために，具体的な研究事例の紹介を踏まえた講読とディスカッションを含めて進行していく。	

		考古資料保存論	考古資料は，材料学的に分類すれば，有機材料（木材，漆，草など），無機材料（鉄，銅，土器など），有機と無機材料が複合した複合材料に分類される。これら多様な素材で構成されている考古資料の保存処理では，それぞれの材料に関する特性を理解し，適切に劣化状態を診断する能力が求められる。本授業では，考古資料の材料学的な理解を深め，これらに応じた保存方針の策定および保存処理の理論的な技術体系の習得を目指す。	
		民俗文化論Ａ	東北の民俗信仰のうち，オシラ神信仰について取りあげる。授業の最初にオシラ神信仰の研究史を概観したのち，担当者を決め，文献を講読し，理解を深める。弘前大学民俗学研究室で行ってきた調査資料の中の映像資料を取りあげ，その分析も行う。オシラ神研究のうち，東北の事例や北海道の事例を取りあげた論文の他，アイヌのイナウと関わる資料，韓国の祭文研究との関わり，オシラ神と「憑依」に関わる資料と論文を講読した後，議論をして新しい研究の視角を探る。	
		音楽文化史	西洋音楽研究における音楽史学の方法論に立脚し，音楽文化の歴史的変遷を捉えることを目指す。授業は主として日本語，あるいは英語，またはドイツ語で書かれた専門書ないし学術論文のレポートを土台に行う。課題文献は，受講者と教員の協議によって決定する。 20世紀半ばまでの音楽史研究は作品の様式を特定し，作曲家とその作品を歴史的に位置づけることを目指してきた。こうした旧来の様式史，いわば作曲・演奏・鑑賞という枠組を前提とした音楽観は批判されてすでに久しい。しかし結果として音楽史記述の手法が拡散の一途を辿るなかで，音楽史の妥当性を見失わないためには，そもそも何のために音楽史が書かれるのかを問い直す必要がある。本講では，幅広く音楽活動音楽の創作と記録，伝承と伝播を社会史的・文化史的観点から捉え，現代人の精神生活に過去の音楽がどのような意味を持ちうるかを考える。	
		日本古典文学Ａ	日本古典文学研究の方法として，物語の読み解き方を学ぶ。主に『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』といった説話集を題材として，歴史・美術・宗教などの隣接分野の研究成果を取り込みながら，日本文学作品の背景を含めて文脈を丁寧に読み解く方法を学ぶ。『今昔物語集』『宇治拾遺物語』には，中世における古典文学世界の人々の生き方や，考え方がよく表現されている作品である。講義形式で概要を解説した後，実際に演習形式で発表担当をし，古典文学作品の調査研究方法を学び，先行研究を取り込みながら古典文学作品を読み解く読み方を修得し，古典文学世界の理解を深める。	講義　20時間 演習　10時間
		日本現代文学Ａ	昭和期以降（特に戦後以降）の日本文学の展開を学ぶとともに，そこで得た知見を基に，履修者各自が課題を立て，発表・討議することを通して，主体的な学びを実現することが目的である。まず，戦後日本において，文学がそれ以前と異なるメディア状況の中で展開してきたことを講義形式で体系的に学ぶ。ついで，いくつかの特定のテーマに基づく履修者各自の発表と討議を行う。文学作品や批評を精読する方法といった，日本近現代文学研究に必要なスキルを習得する。また，文学とメディアの関係を学ぶことで，文化と社会事情やメディア状況との関係に関する知見を深めることができる。本科目は日本語・日本文学系の中でも，研究上必須の専門的な知識を涵養するものである。	
		日本語学Ａ	日本語学の基礎知識を応用して，専門的な分野における考察検討ができるよう，日本語学領域のうち，音声・音韻，文法について概説する。現代語を中心に考察を進めるが，それにとどまらず，歴史的変化，地理的変異（方言）も視野に入れる。また，言語と社会の関係性についても講義する。「日本語学の基礎的知識，および基本的な考え方を身につけること」「文化資源ともいえる言語を多角的，複眼的に捉えられるようになること」を到達目標とする。	

	日本仏教文学論Ａ	日本の古典文学は，仏教の影響を大きく受けて形成されている。そこで，特に御伽草子を題材としながら，仏教と文学の関係，法華経と文学の関係を学ぶ。仏教の基本を学んだ上で，仏教の中でも，草木成仏や龍女成仏といった，日本文学に特に大きな影響を与えた思想を学び，基礎知識を身につけた上で，日本の古典文学作品を解読する。『道成寺縁起』や『熊野の本地』といった著名な作品を題材として，演習形式で読み解き，仏教と日本古典文学の関係についての理解を深める。	講義　20時間 演習　10時間
	日本近代文学論Ａ	明治期以降の日本文学を中心に，履修者各自の研究課題を討議の中で洗練し，あるいは深化，発展させることが目的である。まず，明治期以降の日本文学・文化に関する知識や，文学作品を分析するための理論に関する講義を行う。それを踏まえて履修者各自が論文を提出・発表する。教員を含む出席者同士の厳密な討議を行い，多角的な検討を行う。あるいは，履修者が相互に研究課題の再検討を行う。この作業を通して，批評的な見識や学術的知見が深まることになる。本科目は日本語・日本文学系の中でも，教員と履修者，あるいは履修者同士の対話を引き出すコミュニケーションを重視するものであり，各自の研究課題を有効に展開するために必要な知識や，各自の課題解決に向けて必須の技量を涵養するものである。	
	日本語学方法論	日本語学の方法論について演習形式で学ぶ。具体的には，専門的な論文を精読していくことを通して，日本語の体系・歴史・方言をどのように捉え，どのように叙述すればよいのかを考察する。論文読解にあたっては，まず著者の意図するところをくみとりながら，内容を過不足なく押さえる。そのうえで，研究史上に正確に位置づけ，問題点を指摘し，発展的な解決方法を見出すことを目指す。「日本語学の知識，および考え方をふまえたうえで，自ら課題を見出し，その課題を解決できるようになること」「文化資源ともいえる言語を多角的，複眼的に捉えられるようになること」を到達目標とする。	
	日本語学資料論	日本語学研究における資料論について概説する。研究資料には様々なものが想定されるが，それらを扱う際の注意点や研究手法について講義した上で，学生が研究発表する，学生主体の科目である。古典文学や近代文学，現代文学だけでなく，資料には，新聞や辞書等，多種多様なものがあるが，『日本国語大辞典1巻～13巻』の項目通読や影印本での古典読解といった具体的事例を通して，言語事象の諸相について考察する。	
	倫理学	日米欧の思想文化を「エートスの学知」という学術的観点から学ぶため，多言語間の相互理解に注目しながら日米欧の哲学・倫理学テキストを読み解き，日米欧の思想文化にかんする学識の倫理学的意味を考えながら，その学識を身につける。こうして倫理学を「エートスの学知」と理解する観点から考えれば，一方で人びとが暮らす場所のエートスである習俗は規範や規則へと整備され，他方，その場所に暮らす人びとのエートス，つまり，土地柄，人柄は性格的徳へと結晶化していくこと，これらが判明する。われわれ人間が世界各地のさまざまな地域環境に住まい，エートスを形成していくことへの学的問いを以上のようにドイツ，フランス，古代ギリシア，日本の思想文化から学ぶことが本科目の内容である。	
	東アジア思想史	地理的，または政治的空間としての狭義的東アジア三国，つまり日本，中国および朝鮮は近代まで従来中国の思想文化（またはインドの仏教文化）を中心に，東アジア三国が長い歴史の中でそれぞれ独自の思想課題をみいだし，東アジアにおける歴史的多様性と共通性という様相を呈してきた。当該授業はそうした歴史的な知のソースに関する今日的な意味合いを掘り下げながら，各自による歴史社会や現実認識と思考の糧を培う作業として展開する予定である。	

		中国古典学Ａ	漢文で書かれたテクストを読み解きながら中国における古代思想を概観する。ここにいう古代とは春秋戦国から漢初までを指す。その中心をなす戦国時代は，諸子百家の思想が花開いたときである。黄河文明をふまえた豊かな精神文化が育まれ，孔子の倫理思想のような高度な思想が生みだされた。ほぼ時を同じくして西方では古代ギリシア思想が生まれていた。まずは古代思想全般をひろく概観し，然るのちに「論語」を精読しながら，孔子の思想を吟味する。あわせて孔子とソクラテスとを比較思想的に検討したい。古代中国の思想がグローバル化された現代社会を生きるわれわれに示唆する教えを汲み取ることに努める。	
		美術史	古代から現代までの多様な地域における視覚芸術は，人間観，宇宙観，宗教観，社会観，科学的思考に渡る多様な文化的・社会的指標の変化及び展開と密接に結びつきながら発展してきた。本科目では，視覚芸術の歴史的展開に関する専門的知識に精通し，視覚芸術の課題及び歴史的価値を実証的に把握するための基本的な視点を有し，さらにそうした知識を現代における文化政策及び文化資源の活用のために応用することができる実践的人材の育成を目的とする。受講者は，視覚芸術作品及びその歴史的価値をめぐる講義を通じて，研究史上の課題，最新の研究動向，美術史学を中心とする文化史研究の方法論を理解し，視覚芸術に関する考察とその価値の発信を通じて地域社会に寄与するための基本的知識を修得する。	
		現代音楽思想	ヒトの誕生よりはるか前から鳴り響く空気である音環境（サウンドスケープ）を，ヒトはことばにより解釈し「音楽」と意味づけた。しかし，この音への立ち会い方は，日本と西洋でやがて大きく異なっていく。この東西の違いを比較しながらバロックから古典派を経てロマン派に至る西洋クラシック音楽，ドビュッシー，シェーンベルク，ケージ等19世紀末から20世紀以降の現代音楽，ジャズやJポップを含むポピュラー音楽など私たちを取り巻くさまざまな音楽を，西洋形而上学，構造主義，デリダ等によるポスト構造主義，サイード等によるポストコロニアル理論，シェーファーによるサウンドスケープ思想及びバルト，ソンタグ等による芸術批評を踏まえ考察する。	
		日本宗教文芸思想	日本の宗教文芸思想を形成する基盤の一環に，各宗教・宗派間で交わされる「対話・論争・問答」という様式がある。古代から中世・近世そして近現代にいたる「対話・論争・問答」の諸相と展開をたどりつつ，各時代におけるそれぞれの宗教環境ごとに思想文献を資料探査し解読・考察を加えることによって，日本宗教文芸の特質と論争思想史を再構築してゆく。具体的には，丸山眞男に代表される先行研究の講読を端緒として，空海『三教指帰』で展開された儒仏道の比較宗教文芸論，および不干斎ハビアン『妙貞問答』にみる基督教×儒教・神道・仏教論争の解読と考察を進める。日本宗教文芸思想に関する文献の講義講読を通して，日本思想史研究へのアプローチ方策の実践力養成をめざす。	
		中国宗教思想	中国における中世思想を概観する。ここにいう中世とは漢の武帝による思想統一から唐末までを指す。その中心をなす唐の時代は，仏教および道教に思想が花開いたときである。とりわけ禅の思想は，インド由来の仏教とは一味違った中国独自の思想的な興趣を有する。禅の語録のなかでも屈指の面白さをもつ「龐居士語録」を精読しながら，その超論理の論理ともいうべき知の遊戯を味わう。あわせてわが国における道元の禅思想も紹介して比較思想的に検討したい。中国の禅の思想がグローバル化された現代社会を生きるわれわれに示唆する教えを汲み取ることに努めたい。	

	文化財科学	文化財の現代的な調査や保存に希求される文化財科学研究（年代測定，産地同定，材質・技法，古環境，保存科学，探査，情報システム，防災など）についての最新研究を紹介する。また，文化財科学の各専門領域の重要な論文を読み解き，受講者と教員のディスカッションを通じて，文化財の科学的な分析の方法論と分析結果を解釈する能力を身につけ，文化財の利活用に関する本質を深く理解し，次代へと継承する能力を養う。	
	音楽学	聴覚文化の一角を担う音楽について，学問的に研究する方法論と各研究分野のトポスおよび資料を概観する。授業は主として英語かドイツ語で書かれた概説的文献の講読を土台に行う。 まず「音楽」概念の再検討から出発し，西洋的な音楽の研究史をたどりながら，音と音楽をめぐる美学上の諸問題を紹介する。また，近代以降の音楽学諸分野の目的と方法論を概観し，基礎的な用語と主要な情報源を確認する。さらに，聴覚文化研究としての特殊性（あるいは特殊音楽的問題）を踏まえ，現代の技術革新や多文化共生社会における「音楽」を，他分野との連携を図りつつ幅広い視点から論じる。	
	考古学資料調査	本学では毎年発掘調査と資料整理を実施し，地域の文化遺産の資源化を実践的に行っている。本科目では，青森県の縄文時代から弥生時代を中心に考古資料の特性と資料化の方法，および分析から文章化の方法について自治体の調査機関との協力による実際の発掘調査と分析を通じて学ぶ。特に考古分析に必要な層位学的手法と発掘調査や分析に必要な技術を習得する。これらを通じて，埋蔵文化財活用のための知識や技術を得るだけでなく，自治体が実際に抱えている課題とその解決法についても理解していく。	
	文化財保護活用論	平成30年度に行われた文化財保護法の改定により，日本の文化財保護行政はこれまでよりも文化財の積極的な活用が強く求められるようになった。国民生活に不可欠な開発行為との関係から，わが国の文化財保護行政のなかで埋蔵文化財の占める比重は大変大きい。一方で地中や水中に埋もれているがゆえに発掘調査により初めてその存在や真価が判明する埋蔵文化財は，多様な文化資源のなかでもとりわけ保護や活用が難しい。大学院修了後に専門職として文化財保護行政に関わるには，埋蔵文化財の特質を理解するとともに，調査から保護・活用に到る一連の流れを知っておく必要がある。授業では実際に行われた埋蔵文化財の調査から活用までの具体的例を検討する作業を通して，あるべき保護と活用の在り方を学ぶ。	
	古代地中海文化論	ローマ時代の地中海各地（ローマ，マグナ・グラエキア，シチリア，サルデニア，東地中海，小アジア，マケドニア，ギリシア，北アフリカ，エジプト，ガリア）の文化遺産（都市計画，建築，美術，碑文）を分析し，その地域的多様性について考察する。その際，考古学，建築史，美術史，碑文学の初歩的な訓練を行い，ローマ考古学の基礎学力を身に着ける。また，現代の地域文化との関わりについても取り上げ，日本の地域文化振興に寄与するための基礎とする。	
	民俗文化論Ｂ	今年度はジェーン・マリー・ローの『神舞い人形』を取りあげ，マイノリテイとしての特質を持つ集団の調査，研究という視点から，担当者を決め，輪読し議論を行う。日本の文化史研究の蓄積と文化財政策への批判的な検討を行う著者をさらに批判的に講読して，内容への理解を深める。授業の最初に講義形式で，研究の基礎となる日本の人形儀礼，人形を用いた芸能を映像を用いて紹介し，研究の背景や，同時代の状況について基礎的な知識を得る。輪読担当者のすべての発表が終了した後に，今日のローカルな文化を扱う際の方法や手続きについて議論を行う。	

		ルネサンス視覚文化論	ルネサンス期のイタリアで作られた視覚イメージがもつさまざまな社会的役割について考察するとともに，それら視覚的媒体を研究するための方法論の提示と実践を行う。具体的には，イコンや祈念像，礼拝堂壁画等の各種のキリスト教美術や，結婚や出産，死にまつわる社会的慣習に結びついた造形物，為政者によって造成された視覚イメージとその版画によるその拡散，古代美術受容と「芸術」概念の形成をテーマとしてとりあげ，ルネサンス期の視覚イメージの役割を多層的に示していく。また，実際にこれらの視覚イメージに関する研究方法の習得と応用を目的とした関連文献の原典講読（イタリア語か英語）を併せて行う。	
		日本古典文学Ｂ	日本古典文学研究に必要な研究方法として，くずし字（変体仮名）を学ぶ。くずし字を翻刻し，生きた資料を活用する方法を学ぶ。その題材としては，絵巻物を中心とし，時には，地域に根ざした資料も活用する。絵巻物としては『伴大納言絵巻』や『北野天神縁起絵巻』を題材に，授業を行う。『伴大納言絵巻』や『北野天神縁起絵巻』を，演習形式で担当発表しつつ，精読する。これらの作品を通じて，平安貴族の生活などに関する基礎的知識や，御霊信仰など，古典文学世界を学ぶための重要なトピックスを学びつつ，くずし字の翻刻や，未翻刻資料の活用方法などを修得し，演習発表を重ねながら，大学院生としての研究方法を習得する。	演習　20時間 講義　10時間
		日本現代文学Ｂ	昭和期以降（特に戦後以降）の日本文学の展開を学ぶとともに，そこで得た知見を基に，履修者各自が課題を立て，発表・討議することを通して，主体的な学びを実現することが目的である。まず，日本の戦後資本主義社会における文学の様相を講義形式で体系的に学ぶ。次に，履修者各自で選択したテーマに関する発表と討議を行う。これにより，研究に必要なスキルを主体的に習得すると同時にブラッシュアップすることが可能になる。また，メディアミックスの観点から日本の現代文学を捉えることで，文化の生成のありようを学ぶことができる。本科目は日本語・日本文学系の中でも，研究上必須の専門的な知識を涵養しつつ，研究を発展的に展開するものである。	
		日本語学Ｂ	日本語学の基礎知識を応用して，専門的な分野における考察検討ができるよう，文法領域の諸問題を検討する。文法に関する近年の研究成果をまとめた『日本語文法事典』の各項目を参考にしつつ，概念の基本，および複数の異なる立場の共通点，相違点を押さえる。そのうえで，受講生との議論を交えながら，それぞれのトピックについてどのような課題があるのか探っていく。現代語，歴史的変化，地理的変異（方言）など，多角的観点から問題を捉えていく。「日本語学の基礎的知識，および基本的な考え方をふまえたうえで，自ら課題を見出すことができるようになること」「文化資源ともいえる言語を多角的，複眼的に捉えられるようになること」を到達目標とする。	
		日本語史	日本語学の基礎知識を応用して，専門的な分野における考察検討ができるよう，語彙・表記を中心に日本語学領域について概説する。古典語から現代語への歴史的変遷に主眼をおくが，社会や生活との関係性も視野に入れて講義する。	
		日本仏教文学論Ｂ	仏教文学の代表的作品である『石山寺縁起』や『矢田地蔵縁起絵巻』を教材として，仏教文学の基本を学ぶ。観音信仰・地蔵信仰など，日本仏教の基本を講義で学び，基礎知識を身につけた上で，受講生の演習発表によって，『石山寺縁起』を精読し，理解を深める。また，僧侶たちは説教や「説法」「唱導」といった活動や，詠歌によって，自らも文学活動に深く関わっていた。また仏教の法会も日本古典文学に大きな影響を与えていた。これら仏教が文学に与えた影響について理解を深め，日本仏教の視点を踏まえて日本古典文学を読み解く方法を修得する。	演習　20時間 講義　10時間

		日本近代文学論Ｂ	昭和期以降の日本文学を中心に，履修者各自の研究課題を討議の中で洗練し，あるいは深化，発展させることが目的である。まず，昭和期以降の日本文学・文化に関する知識や，文学作品の意味付けに必要な，メディアと文学の関係に関する講義を行う。それを踏まえて履修者各自が論文を提出・発表する。教員を含む出席者同士の厳密な討議を行い，多角的な検討を行う。この作業を通して，批評的な見識や学術的知見が深まることになる。本科目は日本語・日本文学系の中でも，各自の研究課題を有効に展開するために必要な知識や，教員と履修者，あるいは履修者同士の対話を引き出すコミュニケーションを重視するものであり，各自の課題解決に向けて必須の技量を涵養するものである。	
		日本倫理思想史	日本倫理思想史をめぐる前近代（古代～近世）と近現代の時代的位相差を見極めることによって，日本の文学・歴史・宗教・文化に対する理解の深化と拡大をめざす。具体的には，時間倫理・生命倫理・宗教倫理・生活倫理にわたる大枠テーマを設定し，それぞれ日本特有の歴史認識・占術文化・信仰史・思想文芸に関する文献をとりあげ，原典精読および先行研究の再検討を展開する。その過程において，時代縦断的に日本倫理思想史学研究に必要となる学術的視座と方法論の修得をめざすとともに，学域横断的に日本思想史文献の読解力・思索力の涵養をはかってゆく。	
		中国古典学Ｂ	陶淵明の詩文を原文（漢文）で読みながら中国六朝期における田園詩について概観する。ここにいう六朝期とは建業・建康（南京）に都をおいた呉・東晋・宋・斉・梁・陳の六王朝を指す。陶淵明の詩は，宋以降にあって群を抜いて人々に愛玩されたが，「隠逸詩人の宗」と称されるように，この詩人の真のすがたは模糊としてとらえがたい。そこで架空の自伝である「五柳先生伝」および『宋書』陶潜伝によってその生涯をたどり，また史上類を見ない思想詩「形影神」および自己に対する弔文「自祭り文」によってその死生観をさぐり，さらに「帰田園居」「「帰去来兮辞」「桃花源記」といった代表的な詩文を味わうことによって，その孤高の精神生活を考察し，いにしえの隠逸詩人の思想がグローバル化された現代社会を生きるわれわれに示唆する教えを汲み取ることに努める。	
		生命環境倫理思想	生命環境倫理学を「エートスの学知」という学術的観点から学ぶため，人間の生命と人間が住まう環境の相関関係に注目しながら日米欧の哲学・倫理学テキストを読み解き，生命環境倫理学にかんする学識を身につけ，その倫理学的意味を考える。こうして倫理学を「エートスの学知」と理解する観点から学ばれるのは，一方で日本各地の伝統的思想文化をふくめた日米欧の思想的文化にかんする学識やローカリティの本質であり，他方，バイオテクノロジーが人類の進化史的アプリオリを損なわないことを重視する学識や人間的ユニバーサリティーの本質である。	
		東アジア思想文化論	中国の歴史思想課題を中心に，たとえば，儒学思想の理解，解釈，再評価などにおいてそれが東アジア諸国，とりわけ，近世の日本と朝鮮王朝時代において，歴史的にどのように読まれ，変異され，またどのように理解を生み出した（再生産されたのか）を思想的連鎖の視野により，掘り探っていき，そうした作業によって東アジア思想文化の特質を浮き彫りにしながら，その今日的意味合いを吟味する。	

		視覚芸術論	古代から現代までの多様な地域における視覚芸術は，人間観，宇宙観，宗教観，社会観，科学的思考に渡る多様な文化的・社会的指標の変化及び展開と密接に結びつきながら発展してきた。本科目では，演習形式の授業を通じて，視覚芸術の本質的価値を分析するために必要不可欠な諸視点及び知識（技法と素材の特性，主題と図像の意味及び機能，表現方法における伝統と刷新，文化的・社会的文脈との関連性）を理解し，美術史学を中心とする文化史研究の方法論を通じて視覚芸術の価値や意義を地域社会に発信するための実践的技能を修得する。受講者は，自らの関心に即した文化的・社会的テーマ（文学，哲学，神学，信仰，魔術と科学，伝承，奇跡，予言等）を設定し，視覚芸術に関する視覚的分析，資料調査，文献読解，研究発表を行い，視覚芸術研究のための実践力を学ぶ。	
		地域アート・プロジェクト論	外国の音楽を聴くこと他人が創ったうたを歌うことではなく，高度な技術を必要とせず，観客を想定する必要がなく，娯楽産業とは無関係で，地域の音環境からしか生まれない音楽，簡素でありながら直観性に富む音楽の実践を，シェーファーによるサウンドスケープ・デザインとメイスによるユニヴァーサル・デザインを基盤に提案する。 シェーファーは今日の音楽教育の問題点について「外国の音楽，他人が創った音楽に価値を置き，高度な技術を要求する。高価な音楽に価値を置き，安価な素材は無視される。音楽は科学，他の芸術，環境とコンタクトが無く孤立している。」と述べる。この指摘はユニヴァ―サル・デザインの原理である公正性，柔軟性，簡素な直観性，エラーへの寛容性，身体への非負担性等と親和性を持つ。既成の音楽の再現を基盤とせず，地域の人々が簡素で直観力に富む自らの音楽，失敗に対して寛容で身体に負担をかけない音楽を創作するための方法論を検討する。	
	現代共生コース	一般言語学	どのような言語を対象とする場合にも，人類言語全般に通じる視点，知識を持つことは肝要である。そのため，特定の個別言語に限らずに人類言語全般を研究するための基盤となる一般言語学は，現代共生コースの言語科学系における中核を成すべき重要な科目である。この授業では，音韻，形態法，統語法，意味の各領域に関して一般言語学的な考え方や手法について学ぶ。それによって，学生がどの言語を対象とした場合にも，世界の人類言語全体の視点から言語を考察できる力を養うことを目標にする。	
		英語学	人間言語の特性を厳密で科学的な手法を用いて明らかにすることを目標とする生成文法理論の目標と方法（生成文法理論の言語観及び哲学的基盤，言語分析の手法及び言語研究の方法論）を学ぶとともに，英語で観察される様々な言語現象の特性を深く理解するために，英文法書（Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum 2002. The Cambridge Grammar of the English Language, Cambridge University Press）あるいは英語学専門書/英語学専門雑誌に掲載される論文の精読を通じて，英語の構造（structure）と範疇（category）に着目した生成文法理論（統語論・意味論）に基づく言語分析の基礎を学ぶ。	
		英語構文学	これまで多くの言語学者たちが英語の様々な構文や現象の性質を記述し，それらの存在を理論的に説明しようと試みてきた。本科目では，言語を科学的に研究する生成文法理論の観点から，英語の構文や現象を概観し，それらがどのような統語的・意味的性質を持つかを正しく認識する。また，先行研究の分析を検討しその問題点を指摘することで，英語の構文や現象に対して自らの分析を考案することができるように促す。言語現象に対する理論的説明を考案することを通して，英語そのものの理解を向上させることを最終目標とする。	

		近代イギリス文学	世界の英語圏で書かれた文学の現状を考慮しながら，英文学を軸にその文学的特徴を考察する。詩や演劇はもちろんのこと，特に19世紀以降英国で隆盛していく小説を中心に，「読解」を通して深く理解することを学ぶ。具体的にはジェーン・オースティンやチャールズ・ディケンズといった19世紀を代表する小説家から，ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロに至る現代作家までを扱う。また同時に，関連するジャンルの文芸や社会現象を学ぶことで多様な思考力を修得する。	
		現代イギリス文学	20世紀以降の現代イギリス文学を講読し，そこから読み取れるイギリス社会の変容をたどっていく。主に小説作品を取り上げ，20世紀以降のイギリス小説が，勃興期や盛期ヴィクトリア朝の小説とどのような点において異なるのか，また，いわゆるモダニズム以降のイギリス文学に起きた変化が，当時の社会的な変化とどのように関連付けられるのか，作品読解を通して考える。ただ単に作品や資料の文字を追うだけなく，様々なテクストについて比較考察しながら，論点を発見し，議論することで，学びを深める。	
		近代アメリカ文学	当初ははるかに長い歴史をもつイギリス文学の傍流に過ぎなかったアメリカ文学が独自の特色を獲得するに至る発展過程において，短編という物語形式は重要な役割を果たしていた。本科目では，特にアメリカ文学がその独自性を模索していた建国期から自然主義期のさまざまな代表的作家による短編作品を読解し，多様な英語表現に親しむことで，読解力を中心に英語の運用能力を向上させるとともに，各時期のアメリカ社会の文化的傾向に呼応してアメリカ文学がどのように発展してきたのかを理解することを目指す。	
		外国語教育論	外国語教育という人間の営みについて，母語以外の言語の習得・学習を研究対象とする第二言語習得研究の視点から学ぶ。はじめに第二言語習得研究が依拠する母語習得研究で得られている母語習得プロセスについて概観し，その上で第二言語（外国語）の習得・学習に影響を与える要因及び習得・学習プロセスについて考察する。次いで，代表的な第二言語習得の説明理論アプローチを取り上げ，それぞれの可能性と限界について検討する。さらに，第二言語習得研究で得られた知見を基に外国語教育の現状と課題について考究する。	
		言語文書処理	文書の国際化およびIT化に対応した言語文書処理について実践的に考察する。まずASCIIやISO8859など諸外国の文字コード，JISやShift-JISなどの日本語の文字コード，およびUNICODEなどの統一文字コードの仕組みとその問題点を，文字処理の実践を通じて理解する。次に，多言語が混在した文書の処理や解析，文書を管理・公開するシステムの扱い，コンピュータ上の文書規格であるSGMLやXMLなど扱う場合の問題点を，コンピュータを使った実践的な処理を通じて考察する。	
		アメリカ現代小説論	本講義では，アメリカ社会が最も変化したといわれる19世紀末から20世紀に書かれたアメリカ文学の短編作品を読みながら，現代アメリカ社会についての理解を深めることを目的とする。対象作品としては，主に女性作家によって書かれた作品を多く取り上げ，世紀転換期から現代アメリカ社会における女性の自己確立が，文学作品に如何に示されているのか探る。授業ではただ英文を精読するのではなく，毎回一作品を一人の学生に担当してもらい，まず，作家，作品の描かれた当時の社会的背景，作品内容，作品分析，疑問点などを発表してもらう。授業後半では，担当者の発表を踏まえてディスカッションを行い，作品についてより深い読みをすることを試みる。	

		西洋古典学	本講義では，現代ヨーロッパの歴史文化の源流としての西洋古典古代についての学術的理解を深める。同時に，西洋古典古代の歴史文化的研究が，グローバル化と共生の時代を生きるわれわれにとって，どのような現代的意義をもつかを明らかにする。 古代ギリシア・ローマの歴史文化は，ユダヤ・キリスト教の歴史文化とともに，現代のヨーロッパの礎（いしずえ）を形成してきた。「ヨーロッパとは何か」という問いに対して的確に答えるためには，その歴史文化的源流にあたる西洋古典古代についての深い理解が不可欠である。 本講義では，現代ヨーロッパの歴史文化的源流の一つにあたる古代ギリシア・ローマの多様な知的文化遺産（叙事詩，叙情詩，悲劇喜劇，哲学，数学，医学等）についての学術的理解を深めることをとおして，これらの文化遺産がグローバル化と共生の時代においてどのような普遍的価値をもっているかを考える。	
		中国史	2000年を超える皇帝による中国王朝支配は当時においてグローバルなスタンダードを示すものであり，東アジア地域における政治・制度の根幹を成すものであった。このことは日本や朝鮮半島の諸国，ヴェトナム等の国家制度に与えた影響からも明白である。また，中国と言えば漢民族の印象が強いものの，実際には漢民族系（農耕系）と遊牧民族系が交互に支配権を掌握していった。そこにおいては基本的に中国社会が多文化社会であることは必然であり，このような多文化社会をいかにして政治・制度的に包摂していったかについての通史的理解を，受講生が具体的に史料に向き合うことから具現化する。	
		南アジア史	南アジア史を研究する面白さとは何か，南アジア史は他地域の歴史とはどのように異なる歴史的特徴を持っているのかを主に講義形式で論ずる。また，演習形式も取り入れ南アジア史の基本的知識を習得する。演習では，南アジア史に関する基本的文献を講読する。 多くの宗教，民族が絡み合って展開されて来た南アジア史を学ぶことは，多様性に基づく共生社会の実現に向けての学びにつながるという視点を大切にする。 次のテーマを取り上げる。南アジアの諸民族（アーリヤ民族，ドラヴィダ民族等），南アジアの諸宗教（ヒンドゥー教，仏教，イスラーム教等），南アジア史の流れ，南アジア社会の構造（カースト社会等）等。	講義　20時間 演習　10時間
		イスラーム史	現在イスラームを基盤とする文化が根付いている地域に関して，それがどのようにして形成され，現代にまで至っているかということを知るには，歴史的な視点からその形成について問い直すことが必要となる。その際，メディアなどで中心的に取りあげられる宗教対立などを代表とする宗教的側面だけではなく，統治論，法，経済，民衆文化，科学，ジェンダーなど多岐にわたるテーマについて過不足なく理解していくことが必要となる。本科目では，それぞれ，教員が用意した概論的な解説と，受講者が選択する専門の論文を交互に読んでゆくことで，その歴史的背景について学習する。	
		日本古代史	日本古代史を学ぶ事で，現代社会にどのような問題提起ができるだろうか。歴史学においては，様々な文献史料を博捜し，幅広い視点から当該期の社会全体を俯瞰しつつ，個別具体的な問題を史料に即して考えていく力が求められる。本授業では，東アジア諸国に範を取った古代日本の国家体制について，政治・制度・国際関係・社会・文化等の諸側面から，史料に即して論じ，理解することを目的とする。同時に，各時代の講座論文の輪読を通して，古代史上の諸問題について，現在までの研究の到達点を紹介しつつ，多角度から日本古代史を考える視点と，膨大な先行研究を整理してそこから自身の見解を論じていく力を身につける。	

	グローバルヒストリー論	近年の世界システム論もしくはグローバルヒストリー研究において，近世以降（15世紀～18世紀）の歴史像の見直しと再構築が急速に進展しつつある。とりわけ，(1)世界規模の商業ネットワークの形成，(2)移民や奴隷などの大規模な労働力移動，(3)それらにともなう生態系・環境の劇的な変化，(4)知識や技術の普及と受容という4点にかんして，いわゆる「大航海時代」以降のヒト・モノ・カネ・情報などのグローバルな規模での移動・交流の実態とそれにともなう世界の各地域の変化をめぐって研究や議論が活発に展開している。本授業は，こうした近年の世界システム論やグローバルヒストリーの研究動向や学説を紹介すると同時に，環境や疫病，交易などのトピックからグローバルヒストリーの実践について検討するものである。	
	近代日本政治思想史	共生社会の実現には立憲主義と民主主義が不可欠である。近代日本において，立憲主義と民主主義はいかに受容され展開し，戦後民主主義・日本国憲法の成立に至るのか。従来は，自由民権運動や大正デモクラシー運動にその源流を求めることが多かった。いわば政府批判者が日本の立憲主義と民主主義の基盤を形成してきたと考えられてきた。しかし近年の研究では，大日本帝国憲法起草者や国体論者ら政府寄りの立場の人物たちの思想が再評価されている。こうした研究動向に鑑み，本講義では，デモクラットだけでなく国体論者の言説にも着目しながら，多面的・多角的に近代日本政治思想史の理解を深める。	
	フランス地域論	ヨーロッパ地域圏の中の一国であるということを念頭においたフランスの伝統・社会，つまりこれまでの政治・歴史的な大きな出来事や事件を軸にし，文化・芸術，すなわちその中で生を営んできた人々の，生の在り方やその生き方の表出媒体としての文学・芸術作品，そうしたもののオリジナリティーを把握することに努める。さらには，そうした伝統や社会，文化や芸術を総合的にとらえることによって，過去においてフランスとは何であったのか，あるいは現在，何になりつつあるのかを考察し，この国が世界の中でどのような意義を持っているのか，そしてそれが未来に向かってどのように変化・伝承されていくのかを可能な限り模索していく。	
	Intercultural Studies	（英文） Intercultural Studies is concerned with effective and appropriate interaction with people from other language and cultural backgrounds. This includes developing theoretical frameworks for investigating and assessing Intercultural Communicative Competence (ICC) (knowledge, skills, attitudes, etc.). Broad aims will include for students to begin recognising, exploring and understanding their own cultural assumptions and values. In the second half of the course, students will be brought into contact with the attitudes, values and traditions of other cultures, as steps towards embracing and understanding cultural diversity. （和訳） 本講義では異なる言語や文化的背景をもつ人々との効果的で適切な交流について扱う。これには，異文化コミュニケーション能力（知識，スキル，態度など）を検討し，評価するための理論的な枠組みを発展させていくことが含まれる。本講義における主要な目標は，受講生が自分の文化において所与としているものや価値観を認識・探究・理解していくようにすることである。授業の後半では，受講生は文化的多様性を受け入れ，理解していくステップとして，他の文化における感じ方や価値観，伝統について学んでいく。	

	国際関係論	本科目の到達目標は，多国間主義から一国主義へ激変しつつある世界を冷静に分析できるための能力を鍛え，国際関係と国際関係論の歴史，理論，構造と課題をグローバル的な視野から科学的に理解することである。対話形式（日本語）で専門的な英語文献分析により，国際関係の歴史と理論から国際組織と国際法の専門知識を身につけ，ポピュリズムの危険性，国際レジームの将来など，具体例で２１世紀の課題について考察するための授業である。	
	ラテンアメリカ・カリブ地域論	「アメリカ」とは，米国のみをさす用語ではない。「西半球」「新大陸」「新世界」「アメリカス」ともよばれるその地域には３５の独立国家があり，英・仏・蘭の属領がある。「発見」以降，そこで，「先住民」「黒人奴隷」「ヨーロッパ人」が，出会い，争い，支配／被支配し，そして混淆した。この授業では，広大で多様な表情をもつラテンアメリカ・カリブ海地域の社会と文化を概観するとともに，この地域に関する学術的考察力を養う。また，スペイン語や英語の文献講読を行う。	
	共生社会論	「共生」をキーワードに，「差異」が「差別」や「ハンディキャップ」とならない社会を実現するために必要な思想・哲学・実践を学んでいく。「他者」はいかにして作り出されるのか，また「他者」とのかかわりにおいて「自己」「アイデンティティ」はどのように形成されていくのか，また「自己」と「他者」とのあいだにいかにして「有機的関係」を構築するかについて考える。	
	中国社会論	大国としてさまざまな分野で大きな影響力をもつ中国の社会的特徴を理解し，その特質を客観的に分析できるようになることによって，グローバル化時代に相応しい共生社会の実現を目指すことを講義目的とする。また中国社会に生起している諸課題を解決していくための有効な方法論について議論し，それによって得られた知見によって我々が生活している日本社会の在り方への問いにつなげ，種々の課題に対して多様な形で具体的な提言・提案ができるような能力の涵養に努める。	
	多言語教育論	欧州評議会言語政策部門がまとめたCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）および関連資料のフランス語版（または英語版）の文献講読をつうじて外国語の理解力･運用能力を高めるとともに，講読内容に応じて，関連する言語教育・多言語教育・異文化間教育等についての文献や抜粋を紹介し，多民族・多言語・多文化の共生，言語文化の多様性をめざす言語教育・外国語教育，地域のグローバル化に向けた言語文化教育について討論する。	
	アメリカ社会論	異なる背景を持つ人々が集まるアメリカ社会の中では，常に新たな価値が作り出される一方で，人々の間に深刻な対立や鋭い緊張関係が生じてきた。これらの過程で焦点となってきたことは，「アメリカ人」とは誰であり，いかなる資質や特徴を備えることで，その仲間入りを果たすことができるかというものであり，そのことは階級・人種・ジェンダー・セクシュアリティ・エスニシティ・宗教といった面で常に争われてきた。本講義では多文化社会であるアメリカにおいて人々の間で生じてきた様々なコンフリクトについて取り上げ，異なる価値とそれらをめぐる争い，そしてまた，新たな価値の構築を求める苦闘に目を向け，多文化共生の困難と可能性についてアメリカ社会を事例に考察するものである。	
	憲法	第1に，立憲主義と民主主義の関係をはじめとする憲法総論的課題，第2に，包括的基本権や法の下の平等，精神的自由権，経済的自由権，人身の自由，社会権などの基本的人権に関する諸問題，第3に，国会と内閣との関係や司法権の観念と限界，違憲審査のあり方，地方と国との関係などの統治組織に関する論点を題材として，日本国憲法を解釈するにあたって必要となる主要判例や憲法学説の動向について，主として日本の判例や学術論文を輪読する。	

		民法	「民法」と言っても，その範囲は広いため，ここでは特に民法の中心である「契約法」に限定して授業を進める。もっとも，民法典の中には契約に関係する規定が散在していることから，民法上の各制度が実際の契約という場面でどのように使われているのかを理解しにくい側面があるだろう。そこで，契約の成立から終了というプロセスに従った形で再構成している基礎的文献の講読を通じて，まずは契約法に関する実学的な理解ができるようにしていく。その上で，各自関心のあった問題について，判例などを通じてその理解を深めていくことにする。なお，授業形式としては，受講者による報告を基本とし，これを基に受講者全員で検討をしていく。	
		刑法	犯罪と刑罰に関する基本法である刑法について学習する。基本的には，伝統的な刑法解釈学の手法を身につけた上で，それを現代の様々な刑法学上の問題に適用できるような指導を行っていく。犯罪論では，犯罪の成立要件を中心に刑法総論・各論の諸問題を取り上げる。ここではとくに近時の判例を中心にしながら，最新のトピックスを対象として議論をしていく。刑罰論では，現在の刑罰制度を押さえた上で，刑罰の本質について考える。刑罰に関しては，近時の立法の状況や世界的な動向も視野に入れながら議論を行う。	
		商法	今日，株式会社の存在を抜きにして，現代社会を語ることはできないが，その株式会社による不祥事は後を絶たない。日本に限らず，会社法制の課題は，常に，どのようにして会社の不祥事・違法行為を防止するかであるといっても過言ではない。まずは，ハードローによっていかなる規制をすべきかという観点から，日本の会社法や関連法制による規制の現状，その判例等について，論文等を用いて検討を行いたい。加えて，ソフトローともいうべき，例えば国連の「ビジネスと人権」に関する指導原則などの国際的なコンセンサスや，今日，注目集めるESG投資（environment・social・governance）など，企業行動を規律する可能性がある様々な仕組みにも注目したい。以上に関連する論文や判例（いずれも英語論文をも含む）を素材として，これら問題について検討を行う予定である。	
		労働法	長時間労働，解雇，最低賃金など『働くこと』をめぐる諸問題は枚挙にいとまがない。また，『働き方改革』が推し進められるなか，現代の社会問題を理解するうえで『労働法』を学ぶことは，非常に重要である。そこで，本科目では，日本の労働法制の各テーマついて，学術論文や判例を検討する。各論点，学説，判例，改正の動きなどを整理し，必要に応じて外国法との比較を行うことで，日本の現行規制を客観的に捉え，今後の立法政策について検討を行う。この作業を通じて，労働法を体系的に理解し，解釈論・立法論的考察を行うことを目的とする。	
		比較政治制度論	ある事象の因果関係を明らかにし，その構造を理解するための手法として「比較」に焦点を当て，それを用いて，現代政治における「制度」の役割やそれが政治過程に与える影響・効果について考察する。比較の手法を用いて政治過程における制度間，あるいは制度・アクター間の因果関係を科学的・論理的に考察できるようになることを到達目標とする。 具体的には，選挙制度や統治機構，及び，それらを貫く政治過程の詳細を理解した上で，そのような制度が議員・政党・官僚・利益集団・マスメディア・国民等のアクターに対してどのように作用し，その結果としてどのような政治的帰結がもたらされているかについて検討する。毎回，テーマを決め，それに関する代表的な文献を押さえた上で，各項目に関する現代的な意義・課題について議論する。	

		地方自治論	日本の地方自治について理解することを主な目的とし，外国の事例や理論も視野に入れながら，地方自治について学ぶ。国と地方自治体の関係（垂直的行政統制モデル，水平的政治競争モデル，地方分権一括法，三位一体の改革），地方自治体の政治（首長，議会，住民），地方自治体の行政（地方公務員，予算編成，総合計画，行政評価，行政改革），地方自治体の間の関係（市町村合併，広域行政）などの中から，受講者の関心の高いテーマを選んで学んでいく。	
		言語規格論	世界の様々な言語で使用される文字および文書について概観する。まず，文字と音の対応関係を理解するために，言語音声のシステムの基礎と音韻論の基礎を理解する。次に，アルファベット，インド系文字，漢字，かな，ハングルなどなど様々な書記体系を取り上げ，その綴字法，文字の方向性について理解する。これらの理解をもとに，文書の論理構造とレイアウト情報の関係，文書の管理や公開のためのシステム，文書の国際化への対応，コンピュータと文書のあり方などを中心に考察する。	
		現代アメリカ文学	本講義では，英語圏で出版された様々な文学作品をとりあげ，「文学研究」という視点から読解することで，文学を他の様々な文化的・社会的背景と関連付けてとらえ，分析をする力をつけることを目指す。授業ではまず，文学研究の入門書を読み，教官による講義形式で文学研究に必要な専門用語の理解や，専門的知識の習得を目指す。その上で，英語で書かれた様々なジャンルの文学作品や文学批評を，作品ごとに担当者を決めて，担当者を中心に読み解き，「文学テクストとは何か」，「文学研究とは何か」を探る。英文をただ精読するだけでなく，作品分析という視点から読む練習をすることで，作品をただ「読む」のではなく，「読解」する力を養う。	
		言語類型論	近年の言語類型論は，言語普遍性の研究と密接な関係を有し，地理的，系統的，類型的に偏らない世界諸言語からの広範なデータを基に，種々の言語現象に関して類型化を通じて人類言語の普遍性および変異のあり方を解明し，さらにそれらに対する説明原理を探求する。この授業では，言語類型論の具体的な研究に触れ，世界の人類言語には種々の普遍性が存在し，変異が見られる場合にも恣意的に異なっているわけではなく，しばしば一定の普遍的な原理に従って変異していることを論じる。それによって，一言語内部の研究では明らかにならないような種々の普遍性を探求する手法を身につけることを目標にする。	
		言語構造論	普遍文法とパラミターで構成される人間言語の言語知識の解明を目標とする生成文法理論の枠組みで，英語で観察される様々な言語現象（例えば，右方移動，文体的倒置，述語句（動詞句）削除，there構文，小節，as挿入節及び比較節，複数の助動詞連鎖等）に対する生成文法理論に基づく言語分析を取り上げる。英語学専門書あるいは英語学専門雑誌（Language, Linguistic Inquiry, Linguistic Analysis, Lingua, Journal of Linguistics, Chicago Linguistic Society, English Linguistics, Gengo Kenkyu 等）に掲載された論文の精読を通じて，統語論（生成文法理論）の基礎を学ぶ。	
		言語統語論	英語は，時代を経るごとに様々な変化を受け，現代の英語の形式に至っている。これまで多くの歴史言語学者たちが各時代の英語（古英語，中英語，近代英語，現代英語）にどのような変化が生じたかを調査し，その要因や影響に対して理論的説明を与えようと試みてきた。本科目では，各時代の英語の形態的・統語的特徴を概観し，英語が歴史的にどのように変化してきたかを認識する。また，先行研究の分析を概観することで，特定の構文や現象の歴史的発達に関する知識を得ることを最終目標とする。	

		イギリス近代小説論	プロップやグレマス，ジュネット，チャットマン，ブース，シュタンツェルからフルーダニクにフェランといった現代のナラトロジーやリーチ＆ショートなどの文体論を「読解」あるいは「講義」することにより，小説の構造を理論的に理解する。さらにその理論を援用して，イギリスのヴィクトリア朝から現代に至る小説を「読解」し「分析」することで，内容的側面からだけでは明らかにされない特徴を明らかにしていくと共に，多様な思考力も習得する。	
		イギリス現代小説論	20世紀以降のイギリス小説において，イギリス社会がどのように描かれてきたのかを考察する。帝国の解体や，大戦がもたらしたイギリス社会の変化は，その時代を生きた作家による小説舞台においてどのように表現されるのだろうか。また，作家にとって，小説によって社会を描くことにはどのような意義があったのだろうか。小説以外の資料も適宜参考にしながら，階層社会といわれるイギリスにおける社会と個人とのつながりについて学び，小説作品と文化的・社会的背景のつながりを捉える。	
		近代アメリカ文化論	元逃亡奴隷でありながら代表的なアフリカ系アメリカ人知識人となったフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass, 1818-95）が著した三つの自伝は，奴隷制をめぐってアメリカ社会が激動した時代を知るための最重要文献である。本科目では，特に第二自伝『私の隷属と私の自由』（My Bondage and My Freedom, 1855）を中心としてダグラスの著作を英語の原文で読み解くことを通して，読解力を主とした英語の運用能力を高めるとともに，アメリカ社会と文化がどのような文化的趨勢の下で変容し，現在のような姿となったのかについて多角的な理解を深めることを目指す。	
		第二言語習得論	ヒトはどのようにして母語以外の言語を習得・学習するのか，そのメカニズムの解明を目指す第二言語習得研究について学ぶ。特に，第二言語（外国語）の習得・学習における個人差に焦点をあて，それを生み出している学習者要因の具体例を取り上げ，認知面及び情意面から検討する。なかでも，習得・学習に強い影響を与えていると考えられる動機づけの理論について考察する。さらに，動機づけに関わる構成概念として，第二言語（外国語）によるコミュニケーションへの意志と外国語学習不安をとりあげ，両者の相互作用とそれが第二言語（外国語）における言語認知プロセスに与える影響について考究する。	
		西洋史	この講義では，長い18世紀のイギリス海軍（the Royal Navy）を文化史的アプローチから考察することで，イギリスの議会や選挙をめぐる政治文化，記念行為がもつポリティクス，帝国をめぐる認識などの諸問題を解明することを試みる。そのさい，(1)セント・ポール大聖堂における海軍の英雄の顕彰と(2)ウェストミンスタ選挙区における海軍士官の連続当選という2つの事例にとくに注目して，当時のイギリスで広範にみられた海軍の「神話」のありようを考察することとしたい。	
		日本近現代史	日本近現代史に対する認識をめぐっては東アジア諸国との対立がある。従軍慰安婦，南京大虐殺，徴用工など，枚挙に暇がない。それらが政治的対立の原因になっている。歴史認識問題は，共生社会の実現に向けた諸課題のひとつである。本講義では，政治外交史や植民政策史など，東アジア諸国との関係を中心に多面的・多角的に日本近現代史を概観し学術的理解を深め，グローバル化と共生の時代に相応しい近現代史理解と価値観を養う。そして，共生社会の実現に向けた諸課題の解決のための方策を考えていく。	

		ヨーロッパ古典文化史	本講義では，ホメロスの時代からヘレニズム期にいたる古代ギリシア文明の特質とその歴史的展開について，古代ギリシア人の政治・社会制度，世界観・人間観，歴史認識，学問観等の観点に立って，多面的かつ体系的に理解することを目標とする。 古代ギリシア文明は，いわゆる文化的な先発地域にあたる古代エジプト文明や東方オリエント文明の影響を受けつつ，きわめて独自の発展をとげてきた。本講義では，ギリシア文明の特質の一端を理解するために，古代ギリシア人の人間観に注目する。 ギリシア文化史の最初期に登場するホメロス・ヘシオドスが，古代ギリシア人の伝統的人間観の成立においてはたした役割を解明するとともに，以上のようにして成立した伝統的人間観がかれらの政治・社会制度の中でどのような方向に展開していき，ギリシア古典期からヘレニズム期にかけて時代の状況が大きく変動していく中で，どのように変容していったかを明らかにする。	
		中国近世史	中国の近世は14世紀半ばに建国された明朝以降，清代までをカヴァーする時期を指す。所謂「14世紀の危機」において，アフロユーラシアに張り巡らされたモンゴルによる世界支配が崩壊する中で，東アジア地域の支配勢力として登場した明朝は，豊かな物産と銀の需要によって世界経済の牽引役となっていった。中国近世を学ぶことはグローバルとは何かを知る上でも不可欠なことである。受講生は明代に関わる漢文による基礎的文献史料をしっかり読み込むとともに，研究手法に大きな影響を与えた各種の歴史理論について，その問題点について理解を深めることを目的とする。	
		南アジア近現代史	南アジア近現代を生きた人々は何を課題としてどのようなアプローチで行動して来たのかを主に演習形式で論ずる。また，講義形式も取り入れ南アジア近現代史を研究する基本的視座を習得する。演習では，南アジア近現代史に関する基本的文献を講読する。 南アジア近現代とは反英運動の時代から独立を経て今日に至るまでの時代である。南アジア近現代史を学ぶことは，今日私たちが直面している諸課題の解決に向けての学びにつながるという視点を大切にする。 次のテーマを取り上げる。ガンディーの非暴力運動及びサルヴォダヤ運動，ガンディー亡き後のガンディーの運動の継承，ネルー及びインディラの政治，ヒンドゥー至上主義，民族紛争　等。	演習　20時間 講義　10時間
		西アジア地域史	西アジア地域では「イスラーム」という宗教が成立し，それを基盤としたイスラーム文明が発展した。このイスラームの台頭を分水嶺として，西アジアの歴史は一般的な認識においても歴史学研究においても，大きな分断が見られる。本科目では，イスラーム成立前後の中東の歴史について，西アジア地域における古代末期の状況を踏まえながら探究し，その分断についても考察してゆく。その際，現代に通用している言説と歴史史料から再構成できる歴史的事実との関係についても，史料の講読を通じて検討してゆく。	
		日本古代地域史	古代の東北地方・青森県地域に関連する文献史料の精読を行い，この地域の歴史的特質について考察することを目的とする。古代東北の歴史は，主に国家の歴史書に記載されてきた断片的な記録である。本講義では，これらの史料を丁寧に読解することを第一の目標とし，関連する史料や先行研究を整理しながら，古代東北の歴史について幅広い視点で学んでいく。また，東北各地の城柵官衙遺跡などから出土している文字資料など，様々な史資料に対する基本的なアプローチ方法を学びつつ，当時の東北地方の実態的様相についても同時に考えていく。これらを通じて，古代東北地方・青森県地域について考察を深めると同時に，同時代の日本全体の中でこの地域を位置づける視点を身につける。	

		現代ヨーロッパ論	現代ヨーロッパについての理解を深める。 前半では，欧州評議会言語政策部門がまとめたCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）および関連資料を取り上げ，現代ヨーロッパの言語政策である複言語・複文化主義の理念について歴史背景と概要を学ぶ。 後半では，多言語社会ヨーロッパにおける共生社会の実現に向けた諸課題にスポットをあて，その解決に向けた方策，多民族・多言語・多文化の共生，多様性をめぐる展望について討論する。	
		現代アメリカ論	本講義では異なる言語や文化的背景をもつ人々との効果的で適切な交流について扱う。これには，異文化コミュニケーション能力（知識，スキル，態度など）を検討し，評価するための理論的な枠組みを発展させていくことが含まれる。本講義における主要な目標は，受講生が自分の文化において所与としているものや価値観を認識・探究・理解していくようにすることである。授業の後半では，受講生は文化的多様性を受け入れ，理解していくステップとして，他の文化における感じ方や価値観，伝統について学んでいく。	
		フランス文化論	主に近代以降のフランスの文化や芸術に関わる具体的なトピックスについて，関連するテキストや文献を通して，そのトピックスの発生過程，内容や形態，時代的な意義，後世への影響等の理解と認識を深めることが本授業の第一の目的である。しかしながら，そうした理解と認識をフランスという一国内の枠組みのなかでだけ考えるのではなく，ヨーロッパという文化圏，さらには世界的な規模のもっと広い領域の中に位置づけられるような視野を獲得することを目指していく。	
		Quantitative Analysis of Culture	（英文） Internet-based mega-corpora are providing immediate access to previously unimaginable quantities of texts and time-coded data explorable with search functionality. In this course we will be learning about how such resources were built and how they can be exploited for the quantitative analysis of culture. （和訳） インターネットをベースにしているメガコーパスは，すぐれた探求能力を有する検索機能を使うことによって，これまでには想像できなかったほどの大量のテキストと，タイムコードによって時間が記録されたデータに対する即時のアクセスを提供している。この講義においては，どのようにしてこうしたリソースが築かれてきたのか，そしてまた，計量文化解析のために，それらをどのように役立てていくことができるかについて学んでいく。	
		平和学	本科目の到達目標は，国際関係論の１分野としての平和学の主な理論と方法の科学的理解である。「紛争や戦争がなぜ終わらないか」という問題点から出発し，対話形式（日本語）で専門的な英語文献分析により，特に紛争の解決手段としての平和構築の科学的なアプローチ，実績と問題点を理解するための授業である。中東問題や朝鮮戦争とその余波などの長期化した紛争の他に，「テロに対する戦争」のように２１世紀に新たに発生した平和への脅威の原因，経過と解決方法を考察する。	
		民族芸術論	世界の諸民族の芸術表現の在り様を学び，その発生と変遷をそれぞれの社会の歴史経緯のなかでとらえる。具体的事例としてホンジュラスのガリフナ，トリニダード・トバゴのスティールパン，メキシコの木彫り，グアテマラの織物，パナマのモラ，津軽の三味線を扱うとともに受講者が関心をもつ諸芸術について見識を深める。	

	現代オセアニア論	「共生」をキーワードに，「差異」が「差別」や「ハンディキャップ」とならない社会を構築するための様々なアイディアと社会的実践を，多文化主義国家ニュージーランドとオーストラリアの実例から学んでいく。ポストコロニアリズム，ジェンダー，セクシュアリティ，障害，暴力を主なテーマとして取り上げ，多様なテキストを読み解くことを通じて考察する。	
	現代中国論	中国・台湾の政治や外交の背景，またその歴史的な経緯について精確に理解・分析していくことができるようになることを講義目的とする。とくに中国・台湾をとりまく国家間の歴史的な関係性などを念頭においたグローバルな視点によって「中国問題」を考えられるようになることを目指す。それによって日中間に横たわる諸問題の解決へ向けた手がかりを模索し，グローバル化時代における日本のあり方についても考察する能力の涵養に努める。	
	政治学	国家と社会の双方向の視点から政治を捉え，グローバル化と共生の時代に適した統治の手法や政治参加の在り方を考えるための授業とする。政治学の基本的な概念・考え方を踏まえた上で，それらを用いて現実の具体的政治事象について，関係する諸要素間の因果関係を明らかにしながら，科学的・論理的に考察できるようになることを到達目標とする。 具体的には，選挙制度・執政府・議会・政党・官僚制・利益集団等，政治過程における各制度・各アクターに関する基礎的な議論を踏まえた上で，それらがいかに関連し，そこにいかなる因果関係が生じているかについて検討する。各回，テーマを決め，それに関する代表的な文献を押さえた上で，各項目に関する現代的な意義・課題について議論する。	
	行政学	日本の行政について理解することを主な目的とし，外国の事例や理論も視野に入れながら，行政について学ぶ。行政の組織（省の編制，各省の内部）・人事（省別人事，試験による区別，退職管理），政策の形成（法案の作成過程，予算編成過程）・実施（政策実施過程，実施のための組織）・評価（政策評価，行政評価・監視），行政改革（民営化），行政と政治の関係（行政国家，戦後の政官関係の変遷，内閣・大臣とそれらの補佐機構）などの中から，受講者の関心の高いテーマを選んで学んでいく。	
	人権論	私人間における人権保障や違憲審査基準論，人権保障のための国家の積極的義務，日本が批准する国際人権条約の国内適用のあり方など基本的人権の実効的保障に関する諸問題を主要なテーマにすえる。その上で，日本を代表する憲法研究者又は実務家による人権分野に関する著書や学術論文を輪読する。その際，比較憲法の視点を取り入れつつ，国際人権法学と日本の憲法学の通説的な理解の異同などを検討することで，日本国憲法の解釈を深めていく。	
	民事法制論	近年，債権法改正や相続法改正に見られるように，相次いで民法が改正されている。そこで，この授業では，民法改正に関する検討を行う（受講者の希望がある場合には，消費者契約法，製造物責任法，借地借家法なども対象とする）。その際に，例えば，どのような背景から制定されるに至ったのか，その過程においてどのような議論がされてきたのか，そしてどのような問題がなお残されているのかといった点に着目し，法制度に対する理解を深めていくことにより，生活や仕事に生かしていくための能力を養う。なお，授業形式としては，受講者による報告を基本とし，これを基に受講者全員で検討をしていく。	

		刑事司法論	広く事件発生から犯罪者の社会復帰までのプロセスを研究対象として，刑事司法の在り方について学習する。授業の前半では，被疑者・被告人の人権を念頭に置きながら，刑事訴訟の基本原則を取り上げる。ここでは，裁判員制度を含めた司法制度改革や近時の刑事司法の新たな動向を踏まえた議論も行う。後半では，犯罪者の矯正・更生や犯罪被害者保護の現状を学んだ上で，社会への受容の在り方について考える。とくに近時の課題となっている再犯防止施策を中心として，犯罪者の社会的包摂の在り方を議論する。また，犯罪被害者等施策についても，これまでの施策を踏まえた上で今後の在り方を検討する。	
		経済法制論	企業が順守すべき基本的なルールである独占禁止法（競争法）が絡む諸問題を取り上げる。今日，企業活動のグローバル化に伴い，競争法の適用もグローバル化している。例えば，国際カルテルに対する域外適用はその代表例である。他にも，今日的課題としては，GAFA（Google，Amazon，Facebook，Apple）に代表される巨大IT企業の単独行為－日本であれば，私的独占や優越的地位の濫用に該当するような，その支配力の濫用行為―に対する競争法の適用が大きな注目を集めている。このような，世界各国－とりわけ米国・EU－の競争法の運用動向が相互に影響を与えていることから，日本の独禁法が関連する論文のみならず，米国・EUの競争法の事例・論文等も検討対象とすし，これら諸問題に対する理解を深めたい。	
		社会保障法	少子高齢化，年金，生活保護など『社会保障』をめぐる諸問題は枚挙にいとまがない。『社会保障』をめぐる諸問題を検討するには，行政学や財政学，租税法制などさまざまなアプローチがあるが，本科目では，これらの問題を規律する社会保障法制について，検討を行う。学術論文，判例などの文献検討を行い，各論点，学説，判例，改正の動きなどを整理し，必要に応じて外国法との比較を行うことで，日本の現行規制を客観的に捉え，今後の立法政策について検討を行う。この作業を通じて，社会保障法を体系的に理解し，解釈論・立法論的考察を行うことを目的とする。	
	政策科学コース	ミクロ経済学	ミクロ経済学は経済学の基礎科目であり，様々な経済学における応用分野に基礎理論を提供している。その対象は経済学上の最小単位である家計・企業等の経済主体であり，学問上の主な目的は，（1）価格を通じた資源配分の効率性を検討し，市場メカニズムの仕組みを明らかにする事，（2）家計，企業等の最適化行動とは何かを考える事，等である。本講義においては，通常想定される完全競争市場の状態だけでなく，不完全競争市場について講義を行い，市場メカニズムが不完全にしか機能しない状況についての講義も行う。	
		マクロ経済学	まず経済成長理論の出発点であるソロー・モデルを理解し，その後，現代マクロ経済学の基礎となるラムゼイ＝キャス＝クープンマンズ・モデルを学習する。次に内生的成長理論を学習し，技術進歩の源泉である研究開発の重要性を理解し，マクロ経済学の長期モデルの基本を習熟する。マクロ経済学の短期分析としては，リアル・ビジネス・サイクル理論とニュー・ケインジアンモデルを取り扱い，現在の短期分析の基本を修得する。その後，消費，投資，失業などに関する理論モデルを学習する。本科目は主に教科書の輪読形式で行われる。	

		経済政策	市場経済システムが高度に発達した現代の資本主義経済に関する諸問題に対して，国家・社会がどのように対応してきたのかという分析視角から，資本主義の段階的な発展と社会・国家との対応関係を探りつつ，現代資本主義の経済政策の基本的な特徴とその発展の方向性について検討し，経済社会の諸問題を捉えその解決に向けた政策対応を模索する。現代経済社会の諸課題とその政策対応にかんする多面的・多角的な分析・考察をつうじて，経済現象の本質理解と問題解決に資する政策立案に向けた知的訓練を行うことを主たる目的とする。 次のテーマを取り上げる。資本主義経済の歴史的発展段階，現代資本主義の形成と国家の変容，高度経済成長資本主義，現代資本主義の構造転換と新自由主義，グローバル資本主義の行方　等。	
		経済理論史	近代以降の理論経済学の歴史を概観しながら，経済学の発展過程における理論的諸問題を検討する。とくに，アダム・スミス，リカード，マルサス，J.S.ミルに代表されるイギリス古典派経済学に焦点を当てて，彼らの価値理論，分配理論，成長理論，貿易理論，貨幣理論他を検討するとともに，それらの解釈をめぐる現代の経済学者たちによる議論・論争について検討する。こうした問題を検討することを通して，イギリス古典派経済学による現代の経済学に対する貢献を再評価するとともに，イギリス古典派経済学の歴史的意義と現代的意義を明らかにする。	
		財政学	現代財政の理論，制度について講義と演習を行う。政府は租税や公債発行によって財源を調達し，国防，外交，社会保障，教育などさまざまな公共サービスを供給し，これらが国民生活を支えている。この授業では，租税や公共サービスなどに関する基本原理，歴史，特質，政策決定過程などを手がかりに，現代の日本社会が直面する諸問題の現状分析を行う。例えば「財政民主主義」，「ナショナル・ミニマム」，「租税論」等をテーマにした文献や論文に基づき，学生が報告と討論を行い，今後の財政の改革課題を考える。	演習　20時間 講義　10時間
		労働経済学	本講義では，労働市場の諸問題について文献の輪読と討論を通して検討することを目的とする。日本の労働市場が抱える諸問題の中で，人口減少問題に焦点を当てて講義を進める予定である。具体的には，人口減少の実態や人口減少が地域経済に与える影響，そして人口減少の要因分析に関する文献を取り上げる。また，日本の人口減少の要因の一つとして注目されている地域間労働移動の実態とその背景についても議論を進める。以上の学習と通して人口減少に対する諸政策を経済学の視点で多角的に評価することを試みる。	
		国際経済学	グローバル化の中，日本や世界各国が直面している国際経済に関する課題を理解・考察するための国際経済学の知識を学ぶ。貿易のメカニズム，貿易の利益など，理論に基づく客観的で正しい国際経済の知識を得た上で，適切な政策を提案することが出来るようになることを目指す。講義では，制度面や歴史的な側面の説明は必要最小限にとどめ，経済学の基本的な考え方の応用に重点をおく。また，実証分析の研究についても適宜紹介し，理論の妥当性についても解説を行う。	
		企業統治論	企業に関わる諸主体（株主，経営者，従業員，外部委託先など）がそれぞれの利害・思惑で動くときに，その行動をいかにコントロールし，その事業目的に近づけるのか。このようなきわめて実際的な問題意識から企業制度・組織・行動を考察する研究領域が，企業統治論である。講義の中では，主に経営者の任免・報酬と企業業績の関係に焦点をあてる。あわせて，同様の問題が生じる公的機関の運営についても検討したい。講義を通して，企業における諸行動の動機を理解し，企業統治に関わる諸実務を適切に運用することのできる能力を養う。	

		経営組織論	本授業のテーマとしては，企業が事業活動を進めるにあたり，重要な課題となる組織の経営について理解を深める，ということがあげられる。授業では組織のマネジメントの問題を扱う「経営組織論」の基本的な諸理論を学びつつ，日本企業の事例を取り上げ，組織経営の課題やその克服策について理解することを目的としている。そうした理解を通して，受講生は企業に対して的確な助言や適切な提言等を与えることのできる能力を養う。 経営組織論では，組織の中で働く成員に注目するミクロ組織論と，組織構造のデザインに注目するマクロ組織論という2つの領域に大別されるが，本授業ではそれぞれの領域の代表的な議論について学んでいくことになる。また，企業経営の課題を分析し，それらを解決するための具体的な方策を提示する力を養うため，学生自身に企業の事例研究に取り組んでもらう。なお，事例研究の成果を授業内で発表してもらい，教員と学生で議論を行っていく。	
		会計情報	会計情報は現代の会計学における財務会計，管理会計，税務会計，会計監査といった各分野共通で重要なファクターである。そのため，これらの各分野にアプローチするには会計情報をいかに利用し研究に応用するかが課題になる。この点，本講義では研究領域とする各領域に関して内外の最新先行研究を概観した上で，会計情報の有用性を検証する。そしてこの検証を通じて会計学の領域に掛かる論文を作成できるようになることを目標として講義を進める。	
		財務会計	企業は，外部の利害関係者にたいして財務諸表による報告を行う。このような現行のディスクロージャー制度で開示される会計情報について研究・分析するための基礎的な知識と方法を解説する。財務諸表の計算構造と会計基準についての基礎知識を前提としたうえで，会計に関する研究に必要な理論と分析に関する素養を習得する。財務諸表に記載された会計情報がどのように利用され，いかなる影響をもたらすのかを理解することで，財務諸表を基礎とした分析に必要な技法の習得も行う。	
		原価計算	会計情報の作成者としての視点から，原価情報がどのように分類・測定・集計され，利用されているのかを学習していく。授業では，原価計算とそのシステムについて，理論的な変遷の過程に注目し，基礎的な理解を図る。問題演習を通じた計算構造の把握による体系的な習得を目指すとともに，各ツールが実務適用時にどのような役割を果たし，またどのような問題点を持つのかについて考察していく。加えて，各ツールが，いかなる社会経済的基盤との関係で生成・発展してきたのかを検討することで，原価計算に対する深い洞察力を涵養していく。	
		産業創出論	本講義では，地域という場において創出されるイノベーションの特性を理解し，地域の経済や産業の諸課題を踏まえた上で，地域全体としてダイナミズムを生み出すための地域イノベーション・システムのあり方について理論的・実践的に考察する。自治体や地域産業界あるいは地方大学を含む地域コミュニティーは，地域経済を活性化させ地方を創生させるための手段として，イノベーションを梃子とする地域経済の中核となる新産業創出に取り組んでいる。地域からイノベーションを連続的，持続的に生み出す新産業を創出するためには，地域イノベーション・システムの構築が欠かせない。本講義は，地域イノベーションを学ぶことにより，イノベーティブな新産業の創出を支える，起業家マインドを持った企業家（起業家），政策立案者，専門職人材に必要な，地域産業活性化や地域発展の構想策定・計画立案の基盤となる知識の獲得を目標とする。	

	サービスマーケティング論	サービス組織のマーケティング戦略を立案する場合，理論的枠組みを構築することが前提条件となる。そのためには，長年研究が進められた伝統的マーケティングの概要を整理し，経営戦略との整合性，サービス品質を理解しなければならない。講義では，サービス産業のマーケティング戦略，顧客満足度を高める方策を事例研究で考察する。医療マーケティング，観光マーケティング，医療と観光を融合したサービスマーケティングを検討し，成功要因，失敗要因を明確にする。高等学校の商業教育に必要なマーケティングの専門知識は，確実に修得できる内容を講義する。	
	グローバル経営論	本授業の目的は，グローバルな時代の企業経営を考える際に必要な基本的な知識や考え方を身につけることにある。授業では，テキストを通して，20世紀型の多国籍企業の海外展開の論理と，21世紀型多国籍企業の海外展開の論理の違いについて理解した上で，グローバル企業の戦略や組織，市場参入，人的資源管理，戦略的提携などに関わる理論を学修する。また，実践的な思考力を身につけるために，国内外のグローバル企業のケースをとりあげ，受講者自身が経営者であったらどのような意思決定を行うか，ということを考えるためのディスカッションを行う。	
	経済学史	近世から現代に至る経済学の歴史を概観しながら，経済学の生成・発展の過程における諸問題を検討する。具体的には，各時代の主流派を形成した重商主義，古典学派，限界学派，新古典派，ケインズ学派を取り上げ，彼らが主張した経済思想，経済理論，経済政策を体系的に検討するとともに，それらの間の継承関係または対立関係を解明し，経済学の歴史を多面的に検討する。こうした問題を検討することを通して，過去の経済学の歴史的意義と現代的意義を明らかにするとともに，現代の経済学を相対化し，その意義を再検討するための視点を獲得することを目指す。	
	産業組織論	産業組織論は経済を分析するにあたり不完全競争市場に注目する。これは主な分析対象が完全競争市場であるミクロ経済学と明瞭な対比をなす。また，理論的な分析と実証的な分析の双方を重視する点も特徴的である。研究対象は実際の経済政策が中心であり，高い政策指向性を持つ分野である。近年は理論分析においてゲーム理論，行動経済学を積極的に取り入れた研究がなされている。本講義では，理論・実証の伝統的な議論だけでなく，近年の成果を踏まえた講義を行う。	
	マクロ金融分析	まず，金融論における銀行行動に関する理論分析から学習を開始する。次に中央銀行の役割と金融政策の関係について考察する。中央銀行がいかに金融調整を行っているかを金融政策に関する制度を学習することや中央銀行自身が考える金融政策に関する理論などを概観することで，金融政策のマクロ経済学的基礎を習熟する。以上は，文献の輪読にて行われる。余裕があれば，伝統的・非伝統的金融政策がいかなる波及経路でマクロ経済に波及しているのかを日本のマクロデータを用いて，時系列分析による実証分析を行うことで確認する。	
	産業発展論	経済社会における産業発展をめぐる諸問題について，理論と実証の両面から分析・検討することをつうじて，経済活動としての産業の発展や構造変化にかんする基礎知識の習得と経済学的な思考・アプローチにかんする基礎的訓練，文章表現力の養成を目標とする。グローバル化の進展著しい現代社会に鑑み，主に製造業を中心とする日本の産業事情にかんする題材を取り上げ，文献講読・討論をつうじた産業発展の本質理解に取り組む。 次のテーマを取り上げる。グローバル化と日本のものづくり，日本製造業の競争力の変遷，日本製造業の海外生産の展開，製造業における国際分業の動向とグローバル生産体制，日本製造業の今後の展望と課題　等。	

		現代企業論	ヒト，モノ，カネ，情報という４つの経営資源の取引に着目し，取引の場でどのような制度が生み出されてきたのかを解説した上で，さまざまな取引のルールの束である取引制度に焦点を合わせて，現代企業の協働システムとしての事業システムを分析する。具体的には財の取引，資本の取引，労働の取引と情報の取引という４つの取引制度の事例紹介と理論分析を通じてビジネスの世界でつくられているさまざまな事業システムの長短を理解する手掛かりを提示する。	
		金融論	事業資金の調達や投資による資産形成などの企業や公的機関における金融的意思決定はどのように行われるべきか。この問題を現代的な経済学の手法を援用して明らかにする。ここでは，資産価値の評価方法やリスクの適切な捉え方など，企業や公的機関において直面するであろう金融にとどまらない一般的な政策の分析・評価に必要な技法も習得できる。この講義を通じて，資金調達や投資の場面で考慮すべき項目とその内容を理解し，企業や公的機関における金融的な諸実務を適切に運用することのできる能力を養う。	
		地方財政論	現代日本の地方財政について，歴史的・制度論的な視点から講義と演習を行う。地方自治体は，地域社会において生産や生活を営む上で不可欠な公共サービスを供給し，日本では財政支出の過半を地方が占める。その財源は，地方税のほか中央政府からの移転財源で賄われる。この授業では，政府間財政関係に関する基本原理や特質などを手がかりに，一国の経済政策や地域社会と関連させながら現状分析を行う。地方自治や地方財政にかかる諸問題を扱った文献や論文に基づき，学生が報告と討論を行い，今後の地方財政のあり方を展望する。	演習　20時間 講義　10時間
		雇用政策論	本講義では，さまざまな公表データを用いて，北東北の労働市場の問題点を明らかにし，その解決策を検討することを目指す。本講義では地域労働市場の現状を多角的に把握するために，最初に地域労働市場に関する諸文献を輪読する。文献の輪読では，労働市場の基礎的な理論を用いて，各事例の労働経済学的な解釈を議論する。その上で，各受講者が，それぞれが注目する地域を選択し，公表データに用いて地域労働市場の現状把握と諸問題を把握する。そしてその解決策として政策提言を行う。	
		貿易政策論	国際貿易論の発展的な内容について理解を深める。特に，現在，保護主義的な政策が台頭する中で自由貿易政策の在り方について疑問が投げかけられている。貿易政策や保護主義の効果について理論・実証の両面から検討と考察を行う。加えて，最新の研究テーマである企業の輸出入，海外直接投資，多国籍企業についても解説を行う。受講者には授業の最後に，各自，興味を持ったテーマについて計量実証分析の手法を使い，データを用いて仮説を検証する小論文を執筆してもらう。	
		イノベーション論	本講義では,イノベーションという現象が生み出されるシステムやメカニズム，マネジメントを体系的に学び，今日の複雑化・多様化した環境の中で，国や自治体，企業等が取り組むイノベーション活動のあり方について理論的・実践的に考察する。企業が現在の激しい経済社会の環境変化に適応し長期的に維持発展していくための中核に位置付けられるものが，従来の枠組みを刷新し，画期的な事業アイデアにより新しい製品を生み出すイノベーションの創造である。イノベーションを生み出すためには，自社の資源や競争力など内部環境のみならず，市場のニーズや技術動向，競合相手など多くの外部環境を的確に理解した上で，不確実性の高い新技術をマネジメントする必要がある。本講義は，イノベーションについて学ぶことにより企業活動，研究・開発活動の根本を理解し，多様なイノベーション・プロセスをマネジメントする知識の獲得を目標とする。	

		実証会計	現在，会計学に関する海外ジャーナルの傾向を見ると統計的手法を用いた実証的なアプローチの論文が多数を占めている。また，日本においても，近年同様なアプローチを用いた研究が多く見受けられるようになってきた。これらをふまえ本講においては，実証的アプロ ーチを用いた先行研究論文を実際にとりあげ考察を進めていく。具体的なテーマとしては，企業価値と資本市場の関係性，企業価値評価，無形資産の有用性分析などがあげられる。講義では，実証会計論文の構成や論文のリサーチデザインの方法についても触れる。	
		国際財務報告	近年，企業活動のグローバル化の進展にともない，国際財務報告基準を採択する動きが強まっている。このような国際的な会計基準による会計の情報提供がなされる現状を踏まえて，国際的な視点から財務報告及び財務会計における基礎概念について概説を行う。財務諸表に関する基礎概念を習得することで，グローバル化が進む企業活動を写像した財務報告に関する最新の理論と方法論を学ぶ。会計基準の国際的なコンバージェンスを背景とした基準設定に関する議論においても投資家の意思決定に有用な情報を提供することは，財務会計の重要な役割であることを理解する。	
		管理会計	会計情報の利用者としての観点から，管理会計がどのような場面で利用され，実際にどう機能するのかを学習していく。この目的のため，各ツールがどのような計算構造を持つのかという視点を提供するとともに，実際の適用事例の検討を行い，理解を深める中で，基礎的知識を習得する。その上で，伝統的な管理会計ツールの持つ限界を克服するために開発されてきた応用的手法や，日本独自の管理会計ツールについての知見を深めていく。加えて，各ツールを要請する社会経済的基盤との関係性や，ツールそのものの現実的な効果や課題について深く考察していくことで，管理会計に対する深い洞察力を涵養していく。	
		ベンチャー企業論	本講義の目的は，ベンチャー企業を創業するために必要となる事業計画書作成に関する知識・方法と創業した後のベンチャー企業マネジメントについて最新の理論の習得の2つである。 近年，政策的にベンチャー企業の創業とマネジメントは大いに注目を集めている。そこで，起業家を志望している人や起業家教育を志望している人に対して，理論的かつ実践的な知識の習得ならびにベンチャー企業のマネジメントに関するリテラシーの涵養を行う。 具体的には，講義のテーマに応じてベンチャー企業のマネジメントを理解するために必要な知識と最新理論を整理する。次に，本物の事業計画書やベンチャー企業のマネジメントに関する実例を交えた議論を展開する。それを通じて，ベンチャー企業のマネジメントについてより理論的かつ実践的な知識の獲得を行う。 このように本講義では「理論⇔事例」の往復を行うことを通じて，受講生にはベンチャー企業のマネジメントについて理論的かつ実践的な理解の習得を目指している。	

多領域横断型科目	グローバル化と共生社会	グローバル化が急速に進展している状況において，国家間または地域間で生じている様々な摩擦や対立等の諸問題についての理解を深める。そのような状況の中で共生社会の実現に向けて歴史文化や言語，社会制度，政策等の観点から具体的な考究を進める。 （オムニバス形式／全15回） （1 関根　達人，20 上條　信彦，23 原　克昭， 27 中村　武司，28 林　明，29 武井　紀子， 52 大谷　伸治／4回） （上記の教員グループより，各年4名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第１部 グローバル交流の歴史：現在のグローバル化社会の成立を考える上では，どのようにその社会が形成されてきたかを知ることが不可欠である。また，現在の日本の姿を確認しておくことも重要であろう。ここでは，日本および諸外国における内・外の交流史を紐解くことで，グローバル化が何をもたらすのかを論議する。 （1 関根　達人） 日本の内国化とアイヌ・琉球 （20 上條　信彦） 東アジア農耕社会の交流と対立の歴史 （23 原　克昭） グローバル社会における日本人の宗教観～日本人は〈無宗教〉か?!～ （27 中村　武司） 近世におけるグローバル化 （28 林　明） 思想や宗教から見た共生の可能性 （29 武井　紀子） 古代日本と東アジア世界の歴史的展開過程 （52 大谷　伸治） 共生社会における人権 日本国憲法の功罪～「日本化」が生み出した問題～ （7 今田　匡彦，15 細矢　浩志，21 出　佳奈子， 30 熊野　真規子，31 泉谷　安規，35 冨田　晃， 36 澤田　真一，47 朝山　奈津子／4回） （上記の教員グループより，各年4名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第２部 世界にみる共生のあり方：“共生”という概念は一義的に決まるものではない。ここでは，共生とは何かを考えるために，世界各地の共生社会の姿を理解するとともに，様々な異なる視点から共生の意義を考えることの重要性を学ぶ。 （7 今田　匡彦） サウンドスケープ思想を基盤とした音楽のユニヴァーサル・デザインについて （15 細矢　浩志） グローバル化と産業発展 （21 出　佳奈子） ・グローバル化時代のジェンダーとセクシュアリティ ・共生社会と参加型アート （30 熊野　真規子） 国民国家とグローバル化 （31 泉谷　安規） EUのなかのフランス （35 冨田　晃） ラテンアメリカ・カリブ地域からみたグローバル化と共生社会 （36 澤田　真一） ニュージーランドにみる「対話」を通じた差異の克服 （47 朝山　奈津子） 「思想や宗教から見た社会の寛容と不寛容」：ナショナリズムと西洋クラシック音楽	オムニバス方式

		（18 李　永俊，19 加藤　惠吉，37 吉村　顕真， 38 長谷河　亜希子，39 児山　正史，42 金目　哲郎， 45 熊田　憲，54 成田　史子，55 蒔田　純／6回） （上記の教員グループより，各年6名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第３部 共生社会の展望と制度：グローバル化が急激に進展していく中で共生社会を維持し発展させていくためにどのような制度が望ましいかは，政治学・法学・経済学等の視点から考察していく必要がある。ここでは，共生社会に相応しい制度について論究していく。 （18 李　永俊） 労働市場の開放と多文化共生社会構築 （19 加藤　惠吉） ボーダーレス化・グローバル化と企業の持続可能性 （37 吉村　顕真） 子の引き渡しを巡る国内外の状況 （38 長谷河　亜希子） 競争法のグローバル化 （39 児山　正史） 外国人受け入れ政策の評価 （42 金目　哲郎） 共生社会における財政 （45 熊田　憲） 科学技術における競争と協調 （54 成田　史子） 労働法制の世界的動向 （55 蒔田　純） グローバル化と政策形成 （14 平野　潔／1回） 総括：本講義全体を貫く共生社会についての考え方を整理するとともに，様々な分野に渡る講義を通じて共生社会を展望するために必要な学問的要素について提示する。	
	文化芸術社会の展望	（概要） 人間社会の発展や国・地域の活性化における文化芸術の役割を学ぶ。とりわけグローバル化と共生の時代という観点から，文化芸術の歴史と発展，文化芸術の保護と振興，文化芸術の次世代への継承に関する諸問題等を検討する。多様な学問分野から今後の現代社会における文化芸術の意義と課題を考え，文化芸術社会を展望する。 （オムニバス方式／全15回） （2 宮坂　朋，8 山本　秀樹，9 木村　宣美， 22 横地　徳廣，23 原　克昭，27 中村　武司， 36 澤田　真一，48 尾崎　名津子，49 近藤　亮一 52 大谷　伸治／5回） （上記の教員グループより，各年5名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第１部 文化芸術の普遍的価値：人間が生み出した多岐にわたる文化芸術について，広く人文学全般から俯瞰する。ここでは，文化芸術の普遍的価値を世界的な視野から整理し，人間社会の発展との関わりを歴史的事象を交えて考究する。 （2 宮坂　朋） いわゆる「聖地巡礼」という現象 （8 山本　秀樹） 地理的および歴史的視点による世界諸言語の考察 （9 木村　宣美） 自然科学としての言語学 （22 横地　徳廣） 哲学的「文化」概念小史 （23 原　克昭） 神仏習合をめぐる芸術文化～日本人の信仰スタイル～ （27 中村　武司） イギリス海軍の文化史 （36 澤田　真一） ポストコロニアル文学の社会的機能 （48 尾崎　名津子） 日本統治期台湾における日本語文学の展開	オムニバス方式

（49 近藤　亮一）
シェイクスピア英語と現代英語の違いについて
（52 大谷　伸治）
アイヌ史的古代～北方からみる原始・古代の日本～

（4 渡辺　麻里子，6 山田　史生，12 荷見　守義，
17 飯島　裕胤，20 上條　信彦，29 武井　紀子，
31 泉谷　安規，35 冨田　晃，46 片岡　太郎，
47 朝山　奈津子，51 亀谷　学／5回）
（上記の教員グループより，各年5名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。）
第２部 文化芸術の保護活用：文化芸術の保護と振興の在り方を，さまざまな学術的観点から検討する。文化芸術の保存活用の様相と現状の課題を議論した上で，多文化の共生や多言語化の視点等を交えつつ，グローバル化時代の地域における文化芸術の振興の在り方を考える。
（4 渡辺　麻里子）
中世近世資料（古典籍）の取り扱いと伝承について
（6 山田　史生）
・中国古典文学とその映像化
・中国の禅思想と現代日本の禅宗との比較思想的研究
（12 荷見　守義）
歴史的文献資料の伝来・伝承・保存と活用の現在
（17 飯島　裕胤）
文化財・施設の価値評価：仮想評価法を中心に
（20 上條　信彦）
埋蔵「文化」財の地域的活用
（29 武井　紀子）
地域の史資料から考える日本の歴史
（31 泉谷　安規）
フランス文化芸術の現代的意義
（35 冨田　晃）
民族の視点からみる文化と芸術
（46 片岡　太郎）
三次元計測とデジタルアーカイヴ技術を使った文化芸術の利活用
（47 朝山　奈津子）
ドイツ音楽中心史観に基づく西洋クラシック音楽の「価値」
（51 亀谷　学）
中東地域における文化財

（1 関根　達人，7 今田　匡彦，10 野呂　徳治，
11 今井　正浩，14 平野　潔，21 出　佳奈子，
25 小野寺　進，26 堀　智弘，30 熊野　真規子，
50 土屋　陽子／4回）
（上記の教員グループより，各年4名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。）
第３部 文化芸術の継承・発展：自国の文化芸術を人類共通の遺産として次世代に伝えていく際の諸課題を考察する。グローバル化と共生の時代に相応しい文化芸術社会のあるべき姿を展望する。
（1 関根　達人）
世界遺産の現状と課題
（7 今田　匡彦）
芸術とポストコロニアル
（10 野呂　徳治）
外国語教育と文化
（11 今井　正浩）
文化創生・継承の歴史
（14 平野　潔）
表現の自由と刑事規制
（21 出　佳奈子）
グローバル化時代の地域における「アート」の受容
（25 小野寺　進）
イギリス文学と植民地主義
（26 堀　智弘）
批評理論から考える芸術の社会的機能

		（30 熊野　真規子） ヨーロッパと日本の言語教育政策 （50 土屋　陽子） 環境文学とアメリカ （46 片岡 太郎／1回） 総括：本講義全体を貫く現代社会における文化芸術の意義について整理するとともに，文化芸術社会を展望するために必要な学問的要素について議論する。	
	共生の時代の経済・産業政策	（概要） 経済・産業政策に関わる諸問題を多様な学問的アプローチから検討することにより，その理解を深める。共生の時代に適合した経済・産業政策とはどのようなものかを描き出す。 （オムニバス方式／全15回） （17 飯島　裕胤，19 加藤　惠吉，24 内海　淳，38 長谷河　亜希子，43 内藤　周子，44 小杉　雅俊，45 熊田　憲，55 蒔田　純／5回） （上記の教員グループより，各年5名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第１部 経済・産業とグローバル化：共生の時代の経済・産業政策を展望するために，まず，科学技術の急速な進歩と社会の成熟化・グローバル化にともなって変容する経済・産業の諸相をとらえる。変化しつつある情勢を理解する上で，イノベーション，法制度，会計基準などの視点から問題の根本をとらえることが有用であることを学ぶ。 （17 飯島　裕胤） 金融技術革新と企業連携 （19 加藤　惠吉） 財務データの分析の方法と活用法 （24 内海　淳） 多言語対応の行政文書サービス （38 長谷河　亜希子） 地方銀行の統合と競争法 （43 内藤　周子） 国際会計基準 （44 小杉　雅俊） 品質原価計算の実務適用と課題 （45 熊田　憲） 組織間連携とイノベーション （55 蒔田　純） イノベーションと規制 （13 城本　るみ，16 福田　進治，34 南　修平，37 吉村　顕真，46 片岡　太郎，48 尾崎　名津子，53 河合　正雄／4回） （上記の教員グループより，各年4名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第２部 人間の尊厳と経済・産業政策：経済・産業政策は企業や産業の発展のためだけに存在するのでなく，人間の尊厳ある生き方に資することもその目的である。高齢社会におけるケア労働，包括的差別禁止政策，近年の消費者法の展開など，先進国に相応しい経済産業政策を指向する上で必要な課題を追究する。 （13 城本　るみ） 高齢社会におけるケア労働の課題 （16 福田　進治） マルサスの人口原理と救貧法批判の再検討 ～現代における社会政策の望ましいあり方を考える～ （34 南　修平） 包括的差別禁止政策の歴史と現状 （37 吉村　顕真） 近年における消費者法の展開 （46 片岡　太郎） 文化財防災と国際協力	オムニバス方式

		（48 尾崎　名津子） 言語的越境と「断絶」の問題－多和田葉子と東日本大震災－ （53 河合　正雄） 受刑者処遇論と社会復帰支援のあり方 （15 細矢　浩志，18 李　永俊，41 山本　康裕，42 金目　哲郎，57 桑波田　浩之／5回） （上記の教員グループより，各年5名の担当教員を選定し，当該教員が1回ずつ担当する。） 第３部 共生の時代の経済・産業政策：経済・産業政策の多面的・批判的検討を通じて，共生の時代の政策のあり方を考察する。日本経済やグローバル貿易の現状，情報化，人々の社会的関係の変化などをふまえつつ，共生の時代に適合した経済・産業政策を展望する。 （15 細矢　浩志） 情報化社会と経済政策 （18 李　永俊） 共生時代における雇用政策 （41 山本　康裕） 日本経済の現状と財政金融政策 （42 金目　哲郎） 共生の時代における財政 （57 桑波田　浩之） 自由貿易政策の再検討 （17　飯島 裕胤／1回） 総括：本講義講義全体を貫く共生の時代の経済・産業政策の考え方を整理するとともに，このテーマを展望するために必要な学問的要素を提示する。	

特別研究／プロジェクト研究	特別研究Ⅰ プロジェクト研究Ⅰ 特別研究Ⅱ プロジェクト研究Ⅱ	【特別研究Ⅰ・Ⅱ】 特別研究Ⅰ：修士論文の作成に必要となる基本的・理論的知識と技能について広く指導する。専門領域及び研究テーマに関連する分野の著書・論文・報告書の収集と研究，実地調査の進め方等について指導しながら，研究課題と対象とその方法について焦点を明確化していく能力を養成する。 特別研究Ⅱ：修士論文のテーマを明確に設定し，これに即したより具体的な調査研究と分析の方法について助言指導するとともに，研究結果の総合化，論証の弱い部分の補強など，執筆の方法も含めて論文として説得力のあるものに仕上げるための指導を行う。 研究倫理に関する指導：特別研究Ⅰ・Ⅱを通して，研究活動の社会的意義，研究活動における不正行為の防止，その他，研究倫理に関わる諸問題について理解を深めるための指導を行う。 【プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ】 プロジェクト研究Ⅰ：個別課題報告書の作成に必要となる基本的・理論的知識と技能について広く指導する。専門領域及び研究テーマに関連する分野の著書・論文・報告書の収集と研究，実地調査の進め方等について指導しながら，研究課題と対象とその方法について焦点を明確化していく能力を養成する。 プロジェクト研究Ⅱ：個別課題報告書のテーマを明確に設定し，これに即したより具体的な調査研究と分析の方法について助言指導するとともに，研究結果の総合化，論証の弱い部分の補強など，執筆の方法も含めて論文として説得力のあるものに仕上げるための指導を行う。 研究倫理に関する指導：プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱを通して，研究活動の社会的意義，研究活動における不正行為の防止，その他，研究倫理に関わる諸問題について理解を深めるための指導を行う。 （1　関根　達人） ・大学で発掘調査した出土資料を用いて，北日本における物資流通の解明に関して研究指導を行う。 ・弘前城跡の事例研究に基づき，行政と市民の協働を視野に，史跡の調査・保護・活用の在り方に関して研究指導を行う ・３Dスキャナを用いた文化財の調査・記録保存方法に関する新たな視点と方法について研究指導を行う。 （2　宮坂　朋） ・ 東ギリシア野山羊式陶器に描かれた装飾模様とモティーフの様式的図像的分析を行い，編年を完成させて，野山羊式陶画のモデルを明らかにするという課題の研究指導を行う。 ・ローマ時代の浴場建築 について，各地域ごとの発展を取り上げ，機能，ローマ化と都市計画について明らかにするという課題の研究指導を行う。 ・ローマ共和政期の神域であるフォルトゥーナ・プリミゲニア神域の建築，装飾，託宣などの宗教儀礼について包括的に取り上げ，共和政期のローマのヘレニズム化とローマ建築の独自性の確立について明らかにするという課題の研究指導を行う。 （3　山田　嚴子） 「同時代の民俗」を把握するための方法として，フィールドワークの資料を相対化する多様な形態の資料群にアプローチする方法を学ぶ。 （4　渡辺　麻里子） 日本古典文学の研究手法を用い，隣接する歴史学・民俗学・宗教学・美術史などの学術成果を取り込みつつ，日本古典文学に関する研究指導を行う。	

（5　李　梁）
精選された東アジアの思想的古典テキストを取り上げ，受講者の研究の課題との関連を鑑みにして研究指導を行う。

（6　山田　史生）
漢文で書かれた中国古典文献の読解力の養成を踏まえた高度専門的な中国学（文学・哲学）の可能性の開拓に関する研究指導を行う。

（7　今田　匡彦）
ポスト構造主義哲学，サウンドスケープ思想の手法を用いて，音楽を中心とした現代芸術の課題の研究指導を行う。

（8　山本　秀樹）
一般言語学，言語類型論による手法を用いて，言語に関する学生の各研究課題に対して研究指導を行う。

（9　木村　宣美）
生成文法理論の目標と方法（生成文法理論の言語観及び哲学的基盤，言語分析の方法）を学ぶとともに，英語統語論及び日本語・英語比較統語論の基礎的知識を身につけ，生成文法理論（統語論・意味論）の枠組みで，理論的・実証的言語研究をすることができるように，研究指導を行う。

（10　野呂　徳治）
第二言語習得研究における力学系理論アプローチに基づき，第二言語習得プロセスにおける情意要因に関する研究指導を行う。

（11　今井　正浩）
古典ギリシア語・ラテン語の語彙・文法に関する専門知識と文献解釈学の手法を用いて，古代ギリシア・ローマ時代を文献資料等の精確に読み解くための実践的なトレーニングを実施することによって，西洋古典学の専門領域全般に関する研究指導を行う。

（12　荷見　守義）
歴史研究における実証史学の手法を用いて，明代を中心とした伝統中国（特に明朝）の制度史研究の諸課題についての研究指導を行う。

（13　城本　るみ）
現代中国・台湾社会に生起している福祉課題（とくに高齢者問題）を取り上げ，社会学的なアプローチによる課題解決に向けた研究指導を行う。

（14　平野　潔）
伝統的な法解釈の手法を用いて，現代社会における刑事法の課題の研究指導を行う。

（15　細矢　浩志）
資本主義経済システムの生起する諸問題に対する政策的対応を取り上げ，経済現象の本質理解と問題解決のための政策立案能力の涵養に資する研究指導を行う。

（16　福田　進治）
経済学史研究における文献的読解の手法と理論的考察の手法を用いて，経済学の生成・発展の過程における諸問題の解明に関わる研究指導を行う。

（17　飯島　裕胤）
企業や公的機関の諸行動における動機の解明を研究課題とした，政策評価に関する研究指導を行う。

（18　李　永俊）
　労働経済学と計量経済学の手法を用いて，労働市場の諸課題について現状と課題を分析し，修士論文の作成につながる研究指導を行う。

（19　加藤　惠吉）
　財務会計，管理会計，税務会計，会計情報といった分野の論文を作成する院生に対して，特に統計的手法を援用したアプローチを用い，現代企業の分析を行い，研究課題の作成に向けた研究指導を行う。

（20　上條　信彦）
　土器や石器，自然遺物などの埋蔵文化財の分析を通じて，先史時代における生業や社会の復元法について研究指導を行う。

（21　出　佳奈子）
・ヴィジュアル・カルチュラル・スタディーズ／ニューアートヒストリーの手法を用いてルネサンスのジェンダー表象に関する研究課題の指導を行う。
・ルネサンスの宗教図像受容に関する研究指導を行う。
・ルネサンスにおける古代美術受容に関する研究課題の指導を行う。

（22　横地　徳廣）
　哲学・倫理学的考察の手法を用いて，哲学・倫理学テキスト解釈や社会事象の哲学・倫理学的考察といった課題の研究指導を行う。

（23　原　克昭）
　日本思想史学の隣接諸領域（日本文学・語学・歴史学）と相互にジャンル横断することで，とくに日本宗教文芸思想に関する課題の研究指導を行う。

（24　内海　淳）
　グローバル化の進展に伴う外国人の増加に問題を取り上げ，多言語対応の行政文書サービスの課題の研究指導を行う。

（25　小野寺　進）
　ナラトロジーによる文学分析手法を用いて，イギリス文学の課題の研究指導を行う。

（26　堀　智弘）
　同時代のアメリカ社会の文化的思想的背景を考察しつつ，アメリカ文学に関する研究指導を行う。

（27　中村　武司）
　西洋史研究の諸問題について，各自の問題関心にしたがって選択した研究対象にたいして，研究指導を行う。

（28　林　明）
　史料や論文の読解を通して，主に南アジア近現代史に関する研究指導を行う。史料に関しては，史料の正確な読解法，史料が書かれた歴史的背景の中に史料を位置付ける方法等を指導し，論文に関しては，良質な論文の見分け方，論文を自らの研究に役立てる方法等を指導する。

（29　武井　紀子）
　日本史の諸事項について，明確な問題意識の設定と先行研究の適切な整理を前提に，文献史料に基づいた歴史学の実証的論法を用いた研究論文作成の指導を行う。

（30　熊野　真規子）
　地域のグローバル化に関する諸課題を研究課題とし，多言語教育･異文化教育に関する研究指導を行う。

（31　泉谷　安規）
・20世紀ヨーロッパ（フランス）前衛芸術運動における，哲学・思想・文学・宗教・神話学等々の総合の諸試みの特異な傾向を研究課題とし，その目的と意義に関する研究指導を行う。
・19世紀から20世紀における，ヨーロッパの芸術における，文学と絵画（ボードレールからミシェル・レリス，ロマン主義・印象派絵画から20世紀中ごろまでの前衛芸術）の相互影響を研究課題とし，その特に顕著な流れを具体的にたどる研究指導を行う。

（32 BUTLER ALASTAIR JAMES）
（英文）This grad seminar will provide an introduction to methods for using existing corpora, e.g., search and processing techniques, as well as skills for providing corpus data with additional linguistic information, called 'annotation'. In the second half of the course, students will be tasked with developing their own (small-scale) corpus resource.

（和訳）この授業では，既存のコーパスを使う基礎的な方法（検索や処理技術）や，‘アノテーション’と呼ばれる付加的言語情報をコーパスデータに提供する技術について学んでいく。授業の後半では，受講生は自身の小規模なコーパスを構築することが求められる。

（33　FUHRT VOLKER　MICHAEL）
国際関係論や平和研究に関連する分野から各自が興味関心を持つテーマを取り上げ，グローバルな視野から各地域の紛争分析，解決方法等に関する課題について研究指導を行う。

（34　南　修平）
主に第二次世界大戦以降のアメリカの歴史を研究課題とし，現代アメリカ社会における人種や階級，エスニシティ，あるいはジェンダーなどに関連する研究指導を行う。

（35　冨田　晃）
活動実践にもとづく民族芸術研究もしくはフィールドワークにもとづくラテンアメリカ・カリブ海地域研究の研究指導を行う。

（36　澤田　真一）
ポストコロニアル文学理論の手法を用いて，ニュージーランドの先住民族マオリ人作家による文学解釈の課題の研究指導を行う。

（37　吉村　顕真）
特にアメリカ法を比較法の素材として，日本の不法行為法における諸問題に関する研究指導を行う。

（38　長谷河　亜希子）
・会社法上の多重代表訴訟制度について，アメリカ法等の比較法の観点も含めた観点からの研究に関して研究指導を行う。
・事業者性の強い個人自営業者に対する，発注者による不当な契約条件の押し付けという問題に対して，独禁法と労働法の交錯という観点から検討するという課題について，研究指導を行う。

（39　児山　正史）
国や地方自治体の行政が対応すべき課題を特定し，従来の政策を評価した上で，新たな政策を立案する手法に関する研究指導を行う。

（40　小谷田　文彦）
産業組織論における実証分析の手法を用いて，企業活動に関する研究指導を行う。

（41　山本　康裕）
マクロ経済学の理論分析手法や時系列分析におけるVARモデルの分析手法を用いて，現在の日本や他国のマクロ経済や地方のマクロ経済に関する課題の研究指導を行う。

（42　金目　哲郎）
財政関係の資料やデータに基づく事例および制度研究の手法を用いて，日本社会や地域経済における財政のあり方に関する研究指導を行う。

（43　内藤　周子）
グローバル化が進む企業活動を写像した会計情報を分析することを研究課題とし，国際的な視点から財務会計に関する研究指導を行う。

（44　小杉　雅俊）
文献調査に基づく史的アプローチの手法を用いて，管理会計学の課題についての研究指導を行う。

（45　熊田　憲）
イノベーション，特に国や地域が主体となる活動を取り上げ，イノベーションのシステムやメカニズム，マネジメントの課題の研究指導を行う。

（46　片岡　太郎）
文化財科学や保存科学の手法を用いて，文化財の次世代への継承や利活用に関する課題の研究指導を行う。

（47　朝山　奈津子）
音楽史学の方法論を用いて，西洋芸術音楽の楽曲分析，作曲家・作品研究，および受容史と音楽史記述に関わる研究指導を行う。

（48　尾崎　名津子）
明治期以降の活字文化を中心に，広い意味で日本語文学との接点を持つ領域における問題を取り上げ，文化の構築と伝達に関する研究指導を行う。

（49　近藤　亮一）
英語の構文や現象の統語的性質を明らかにすることを研究課題とし，特定の構文や現象の共時的・通時的性質に関する研究指導を行う。

（50　土屋　陽子）
19世紀から20世紀にかけてのアメリカ文学作品を読み解き，激動の時代の中にあったアメリカ社会の変革と変遷についての研究指導を行う。

（51　亀谷　学）
年代記や逸話集といった叙述史料やモノとして残る文書や碑文などの同時代史料を付き合わせることを通じて，中世イスラーム社会のあり方を課題に研究指導を行う。

（52　大谷　伸治）
戦後初期の協同民主主義の展開と帰結を研究課題とし，政治学者・矢部貞治の政治思想に関する研究指導を行う。

（53　河合　正雄）
広く公権力に関連した人権保障や統治組織に関連する領域の中から各自が興味関心を持つテーマを取り上げ，諸判例の射程や諸学説の異同を意識しつつ，テーマに即した主要な判例や学術論文，諸法令，行政文書を適宜紹介・講読しつつ，研究指導を行う。

（54　成田　史子）
法制定の沿革・改正における議論の分析，学術論文の検討を通じた学説の分析，判例の分析，比較法研究等の手法を用いて，労働法研究課題の指導研究を行う。

		（55　蒔田　純） 　若者の政治参加に焦点を当て，学校および学校外における主権者教育が若者の政治意識や政治的行動に与える影響について，研究指導を行う。 （56　畑中　杏美） 　文学研究に不可欠な精読力だけでなく,歴史的な視点も用いて,イギリス小説に関する各学生の研究課題の指導を行う。 （57　桑波田　浩之） 　企業の輸出入，海外直接投資，海外アウトソーシング，保護主義的な貿易政策の効果など，国際貿易の最新の研究テーマに関し，計量経済学の手法を使い，仮説を検証する実証研究の指導を行う。	

弘前大学　設置申請に係る組織の移行表

2019年度	入学定員	編入学定員	収容定員	2020年度	入学定員	編入学定員	収容定員	変更の事由
弘前大学				弘前大学				
人文社会科学部				人文社会科学部				
文化創生課程	110	-	440	文化創生課程	110	-	440	
社会経営課程	155	-	620	社会経営課程	155	-	620	
教育学部				教育学部				
学校教育教員養成課程	150	-	600	学校教育教員養成課程	140	-	560	定員変更（△10）
養護教諭養成課程	20	-	80	養護教諭養成課程	20	-	80	
医学部				医学部				
医学科	112	2年次 20	772	医学科	112	2年次 20	772	
保健学科	200	3年次 30	860	保健学科	200	3年次 30	860	
				心理支援科学科	10		40	学部の学科の設置（意見伺い）
理工学部				理工学部				
数物科学科	78	3年次 2	316	数物科学科	78	3年次 2	316	
物質創成化学科	52	1	210	物質創成化学科	52	1	210	
地球環境防災学科	65	2	264	地球環境防災学科	65	2	264	
電子情報工学科	55	2	224	電子情報工学科	55	2	224	
機械科学科	80	2	324	機械科学科	80	2	324	
自然エネルギー学科	30	1	122	自然エネルギー学科	30	1	122	
農学生命科学科				農学生命科学科				
生物学科	40	-	160	生物学科	40	-	160	
分子生命科学科	40	-	160	分子生命科学科	40	-	160	
食料資源学科	55	-	220	食料資源学科	55	-	220	
国際園芸農学科	50	-	200	国際園芸農学科	50	-	200	
地域環境工学科	30	-	120	地域環境工学科	30	-	120	
計	1,322	2年次 20 3年次 40	5,692	計	1,322	2年次 20 3年次 40	5,692	
弘前大学大学院				弘前大学大学院				
人文社会科学研究科				人文社会科学研究科				
文化科学専攻（M）	10	-	20		0	-	0	令和2年4月学生募集停止
応用社会科学専攻（M）	6	-	12		0	-	0	令和2年4月学生募集停止
				人文社会科学専攻（M）	16	-	32	研究科の設置（事前伺い）
教育学研究科				教育学研究科				
学校教育専攻（M）	16	-	32		0	-	0	令和2年4月学生募集停止
教職実践専攻（P）	16	-	32	教職実践専攻（P）	18	-	36	研究科の専攻の設置（事前伺い）
医学研究科				医学研究科				
医科学専攻(D)	60	-	240	医科学専攻(D)	60	-	240	
保健学研究科				保健学研究科				
保健学専攻(M)	30	-	60	保健学専攻(M)	30	-	60	
保健学専攻(D)	12	-	36	保健学専攻(D)	12	-	36	
理工学研究科				理工学研究科				
理工学専攻(M)	120	-	240	理工学専攻(M)	120	-	240	
機能創成科学専攻(D)	6	-	18	機能創成科学専攻(D)	6	-	18	
安全システム工学専攻（D）	6	-	18	安全システム工学専攻（D）	6	-	18	
農学生命科学研究科				農学生命科学研究科				
農学生命科学専攻（M）	60	-	120	農学生命科学専攻（M）	50	-	100	定員変更（△10）
地域社会研究科				地域社会研究科				
地域社会専攻（D）	6	-	18	地域社会専攻（D）	6	-	18	
				地域共創科学研究科				研究科の設置（意見伺い）
				地域リノベーション専攻（M）	15	-	30	
				産業創成科学専攻(M)	15	-	30	
計	348	-	846	計	354	-	858	

※未だ入学定員が決まっていない大学に置いては、収容定員の後ろにPを記載ください。